

7640

44

不平演説会  
著者 土居大助



039695-000-8

特70-360

不平演説腸ちぎり

谷口 政徳 / 著

M21.5

BDA-0279





自序

天地則不平之大塊也何物  
無不平韓文公曰物不得平  
則鳴物且然况人乎如此戲  
編素不過爲痴人之讒語其



落語家	茶校生徒娘	矢場女	後家	藝妓
-----	-------	-----	----	----



講叙師	人力車夫	書生	書生
-----	------	----	----



1  
24



賣	封	淫	娼	相	乞	相	大	百	權
卜	者	鬻	妓	場	丐	撲	姓	姓	義



一物



鳴與不鳴何是問若夫有不  
得平而鳴者忌其鳴而抑制  
之則其變不可測矣聊記所  
感以爲序

蜀魂吐血之時

晚天識

晚天居士戲著



奇々怪々不思議々君遽かよ壓制の妖雲が去て自由の瑞氣が  
現はれたる。行程變々東洋の空氣と西洋の空氣とを交迭でもあつたの  
か知らん君併し中々天胆ぢやナア然う集會條例保安條例などの施行  
あるよも拘はらす言論自由不平演説といふ看板を掲げるとは亂暴ぢ  
やあまげよ傍聴無料飛入勝手次第と記してあるハハア解つた僕の考  
察では急度遊藝人等の鑑札を受け藝人の資格を以て各々得意の滑稽  
話でも演ずるのだらう夫れでも鑑札がなくては許されぬから矢鱈よ  
飛入は出来ぬ筈だ併しそれは兎も角言論自由などといふ吾々よ取て最  
も好き辻占で夢のような心地がする然り斯ういふ夢ならば黃梁一夢



の間では不満足々成るべく長く夢裡に長く居りたいテハ、く「ライ  
續々人が這入るせ先づ傍聴と出懸けて時と場合よ依たら僕も三寸不  
爛の舌を振て慷慨悲憤の……イヤ夫は禁物々危険だく「然らば何か  
關係の薄いおぼろげな幽霊然とした演説でもして見よう」君するなら  
仕て見たまへ取て退めんが僕は俗よ云ふ鳥よ口の端へ炙を据へられ  
てから以來喋舌と怒ち痛を感ずるから縦令自由言論演説會でも何だ  
か怖ろしい「ア僕は傍聴のみよ仕て置かう」君平常の活潑よも似合ず  
情弱極るぢやないかと二人の白衣卿相今しも淺草なる井生村樓の不  
平演説會よ入れば「コハ抑も如何よ不思議なる哉臨監のお役人様方も  
見へざるよぞ二人はますます不審晴れず怖々ながら傍聴席よ坐して  
四方を見廻せば聴衆無慮幾千といふ數を知らず實よ立錐の地もなく  
頃ろ英國の大政事家グラッドストーン氏がノッチンガム府よて愛蘭自

治案の演説をされしも斯くもあらんと想像せられたり此時聴衆は如何  
なる辨士が出るかと目を拭ふて待ち居し頃て現れ出し辨士は唐  
棧の裕よ薄茶色の絹羽織を着て右の手よ張紙の扇子を持ち演壇をパ  
チ／＼叩きて聴衆を拜せしさまは中々場慣れたものと見へたり辨士  
は已よ口を開きて

「今日ハツ政談の大岡さばきのみよ限る歎といふ題よて一席辨  
じますが一休吾々講釋師社會では迄で辨じて居りますものは多く  
は關ヶ原合戦だとか又は大坂御陣川中島合戦か或は伊達騒動宮本  
武勇傳とかいふもののみ講じて居りましたが是は封建尙武の世よ  
適ふたからでござりませう然るよ今日暇々乎として人智發達の文  
明時代よ當て猶ほ野蠻時代よ適せしものを講じますのは理化作用  
の幻燈會よ向て怪談の眞實を説く如く甚だ愚かなる次第ではござ



りませんか宮本武藏の妖怪退治や鍋島の猫騒動などは今日三尺の童子も信を措くものはなからうと存じます併し天保年度の人間のみ聴すので歐米の風は吹れて明治の新天地は生れた今日の人間は聴かずのでないといふ事なら仕方がない譯ですが左なくば従前の種本を改良して又歐米の新説を輸入しなければ今後喝采を博することとは出来まいと思ひます彼の英佛の革命や瑞米の獨立なども我が國の何々合戦などを講ずるよりか耳新らしくして我が國人の腦裏に新主義を注入しますから少しは益も成り又時世は投ずるかと思へますがそれは政治上は關することがあるから其筋より内々論じがあつたと云ふ人がありましたが政治上は關することは差し止めらるゝとならば大岡政談も亦政治談なれば差し止められなければならぬ筈です然るゝ大岡政談のみは許さるゝとは一向合

点の程かぬ次第では御坐るぬか大岡政談は徳川幕府の事と係ることとで別な差問がないと申すから他國の政治を談じたからとて毫も差支のない理で御坐いますせんか況して他國の事ならば反て大岡さばきより關係が薄すからうと思ひます併し歐米の政談は維新以來我國へ輸入し來たもの故取りも直さず吾が國の政治談と全じものだと附會さるゝ人がありますせば口を籍むで喟然たるより外致方はありませんが決して賢明なるその筋のお方々より箇様な曲た理屈を以てお論があつた譯はありますまいノウウ〜ヒヤ〜ヒヤ〜論者殺すべし〜と聴衆が騒ぎ立るゝ辨士は例の扇子をパチ〜鳴らして之を静め

諸君〜是はよくも政治などを辨へぬ吾々社會故若し詭激の辨論をなして無智の人民を煽動し或は教唆するような事があつては治



安よ妨害ありとの御主意で御坐りませう併し乍ら吾々とても一概  
 よ不學無識よして政治の何物たるを知らないとも限りません随分  
 相應の學力もあつて政治思想を有して居るものが御坐います然る  
 よ是等の講釋師が政談と云へば大岡政談より外もないもの、よう  
 よ心得て歐米各國の政治上の美蹟奇談を辨じませんのは何處か憚  
 る所があつての事ですか歐米の政治を話するよ何の憚る所があり  
 ませう「ヒヤ」若し又歐米の事蹟を演ずるは憚りありとしませば  
 抑も又歐米より輸入し來る書籍より禁じなければなりません書  
 籍は直接よ人よ向て喋舌ませんでも人の腦裏よ侵入しますから口  
 頭より反て感<sup>かん</sup>が烈<sup>はげ</sup>じからうと思ひます然らば口頭よては妨<sup>さまた</sup>げあり  
 書籍よては妨がないと云ふ理は御坐いますよ尤も今回出版條例  
 よ因て風俗を亂し又は治安よ妨害あるものは外國の書と雖も販賣

を禁ぜらるゝようは成りました既よ米國桑港よて發兌したる新日  
 本などは内地發行を禁じられましたが併し今まで發行し居るもの  
 は別よゆ差し止めよなりませんから是等は治安よ妨害なきものと  
 心得て讀みものよしても宜からうと存じます若し今まで發行の書  
 籍も禁ずると申すなら人々の腦裏よ藏<sup>かくま</sup>つて居る無形の書籍は如何  
 しますか勢ひ人々の腦裏を碎<sup>くだ</sup>て奪ひ去らなければなりませんよ是  
 は儒者を抗<sup>かた</sup>よして書を焚<sup>や</sup>れた彼の有名の壓制家秦の始皇その人にな  
 ければ逆も斯る暴逆は致しますよまい況して我が賢明なる廟堂の方  
 々は仔々として人民よ自由を與へんとし給ふ位ですから決して只  
 今述べた如き慘狀は夢よだもなきこと、思はぬものは恐らく天下  
 よあるまいと信じます

と調子よ乗り扇子を以て頻りよパチ／＼と演台を叩きけり「ライ國枝



君流石お手前もので好く舌が廻るぢやないか併し彼も舌が硬張と見  
へる家富君彼が屢ば水を呑むのを見たまへ成程矢張舌が自由よなら  
ぬナ

今改めて申すよも及びませんが政治思想の如きは國民一般よ有し  
て居らねばならぬものであります若し人民よして政治思想よ乏し  
かつたなら何程善美の立憲政体が立ちましても空憲虚文よ属しま  
せう然らば政治上よ關する話しは講釋社會よも追々お許よ成りま  
せうと考へます併し是は吾が國の政治談でありますが歐米の政談  
即ち拿破崙の政談比斯馬克政略などは遠慮會釋なく大岡政談と同  
じく辨じましても宜からうと思ひます然るよ吾々仲間よて戦々競  
々として只今までの讀みもの、外一步もその範圍を出でません  
の矢張之を辨するの才學がないのでせうかアッ、將た別よ深い

譯があることですが私は講釋師社會よあり乍ら未だ之を知りませ  
ん今我が國は目蔽いれ舌縛られて忍るべく悲むべき幕政と違ひ出  
版よ新聞よ集會演說等よ至るまで充分自由を與へられて居ります  
が臆を得て蜀を望む人情ですから甚だ怨が深ふ御坐いますすけれ  
ど尙ほ一層言論の自由を與へられんことを希望致します  
ヒヤ、く、く、家舌耕師よしては中々氣概がある子國さう所謂鉄中の  
錚々たるものだ君今度の肥滿辨士だ成程豚や布袋も三舎を避るも  
宜い加減よ糞船のたしは撤去して貰ひたい然り、又彼が場處へ  
往くと違ひ此の演壇よ上よ羽織を肩よ掛けて居るは不体裁ぢやアな  
いかと評し合ふて喋々たり辨士は最と優然として  
已は相撲は野蠻固有のものよ非ずと云ふ題よて演する都盛ぢや、  
：偕て昔より文武は車の兩輪の如く相俟て離るべからざるものと



してごんす去れば眞の黄金世界と成て人々互は相親愛し毫も侵犯  
することなく法律も無用となり兵備も廢止するやうな極樂世界と  
なれば兎も角否らざれば文のみよて武をければ此の弱肉強食の社  
會よは一國の獨立を維持すことば出來ませぬ此の相撲は人々皆腕  
力の争闘よして野蠻社會の遺物だと輕蔑されますが決して左り輕  
蔑すべきものでごんせん抑も相撲は古は戰場組討の方よて武藝の  
一と多て常々男子の嗜て習練した技を御坐りました彼の野見宿禰  
の事は人口よ増えして誰でも知て居りますが聖武帝の御宇よ至て  
始めて諸國の力士を徵して朝廷よ於て相撲の節會を行われ其後此  
の式は廢れましたが武門に在ては尙ほ之を爲すもの多く高山重忠  
河津保野を始めそれより下りて織田豊臣の世よ至ては決て盛ん  
よなり仙台中納言政宗卿は報中にて土井利勝朝臣と相撲をされ

伊直孝行言を著せられたる申す如く以て當時相撲の盛んなるを見  
るよ足りませぬ去れば當時相撲の體裁柔術と同じく武術の一であ  
つたよ違ひありませぬ然るよ維新以來歐米の文物が此の日の本へ  
輸入をまじてより文道興つて武道衰へ從て相撲の如きものは野蠻  
のものよ罵られて悲哉竟よ裸体垂膺の名稱を下さるゝよ至りまじ  
た諸君よ果して此の相撲が腕力比争闘野蠻固有のものよて文明社  
會よ行はるべきものでごんせん然る文明諸國が万国公法のあるよも  
拘はらず動もすれば互よ争闘して勝敗を武力よ決するは野蠻の遺  
風で御坐りませぬか人と人と角闘するは野蠻よて國と國と角闘す  
るは野蠻でないといふ理がごんすかヒヤク考れば此の十九世紀  
の世の中は東西洋を問はず決して文明といふ申されませぬ且つ人々  
が文明と稱する歐洲よて社會の本體たる學者或はるの取替たる新



聞記者などが若しその論説の是非決しませんときは忽ち果状を送  
 て決闘を試みるさうです彼の有名なる佛のガンベツ氏も或る新  
 聞記者と決闘をしたと申しますが是などは野蠻の遺風ではとんせ  
 んか然るは西洋生嚼みの先生方は何でも蚊でも西洋でさへあれば  
 好いようは心得て矢張り此の決闘も文明國必要の物のようは言ひ  
 まして其説は人々が舌戦口論を爲すとき一人は之を是とし一人は  
 之を非とし互ふその見る所を執て下らぬときは是非を決する能は  
 ず故ふ之を腕力に訴へて事の曲直を決するより外なし彼の一國が  
 外邦に對するも常は道理を以て争ひ道理を以て決するものよあら  
 ず遂に干戈に訴ふるよあらずや云々と左も理屈らしく論じますが  
 腕力を以て理否を決するに至りまゝでは野蠻草味の世と異りあり  
 ますまい決闘賛成論者の如きは即ち狂暴論として取るよ足らぬも

ので御坐ります然るは人々が決闘は文明の諸國も行はるゝから野  
 蠻のものでないようと思ひますが此の決闘の如きものを野蠻と申  
 さなければ野蠻と云ふものはありますまい併し腕力は社會の武氣  
 を養成して文明を進歩さすものです但決闘の如く自他を損害する  
 行爲は決して文明を進歩さす道具では御坐りません此の相撲の  
 如きは自他を害せずまて人々よ勇氣を生ぜまむるものですけれど  
 決闘の如きは自他を害して社會の秩序を紊亂するもので御坐りま  
 す然るは決闘を野蠻と云はずして反て此の相撲を指して野蠻とい  
 ふは道理は違て居りませう今や弱肉強食の社會よ立て徒らよ文弱  
 よ流れ悲哉一國を維持すべき勇力膽氣は野蠻として擯斥せられ  
 ち

謹聴くく 家中々甘ひ頭の野蠻風よ似合す意氣慷慨と云ふべし



彼の彼が膨脹せる腹中よは悲憤が瀟々たる居る哩  
 昔は河原乞巧と卑められた柔弱な俳優などが勢力を得て反て已達  
 よは上位を占めて何れ講義などと稱せられ文明の道具として貴ば  
 れますは是等は冠履所を異ならず申すのでござんす人ウレハヤ  
 借て此の人類は御存の如く物よ接し事よ觸れて感動し又感染しま  
 すもので御坐ります維令ば人々が劇場よ往て道行などの狂言を見  
 ませば自分も亦斯の如き色男色女たらんと思ひます又相撲などを  
 見物にませば勇壯活潑なりて自から腕を扼するようよ成ります  
 は人類の情性で御坐ります故よ演劇の如きは人心を腐敗して情疎  
 よ導くものまで相撲の如きは人心を活潑よして一國の元氣を奮起  
 せしむるもので有嗚呼今や英虎西よ親ひ魯狼格よ踞て孤立せる吾  
 國が斯く柔弱よ瀟々一報國と國との立合と奮闘愈よ上儀際と進歩

ば地も踏張る勢ありは然るは殆んで虎狼の番地所を達する  
 も計り知るべからず時諸君此の如き危急の有様を見ながら遊治  
 郎と爲て道行を試みんとし玉ふか將た勇壯活潑の氣を養て國家の  
 干城となり給ふか如何でござんす  
 と鐵の如き拳を以て演台を叩けば礮然として演台も爲は砕くるかと  
 思はるゝを辨士は顧みずしてツシリと壇を下れば拍手喝采の聲  
 天地を震動するかと疑はれたり已はして聴衆皆な此の次は如何なる  
 辨士が出るかと目を拭ふて待居しは適て徐々として演壇よ登る辨士  
 を見るよツブシの島田番は傾きてその位置を易へ油染たる緋鹿子の  
 手掛は解けて髪の方へ垂れ洗ひはげたる二々子織の衣服は唐縮緬と  
 綿毛縹子の腹合の帯をしめられたれどもその原色を辨じ雅き變色もの  
 なり容貌は颯らすと云ふよあらねども色清さめて少しく目の凹みた



る所よては美よして艶なりとは賞賛しがたし那の辨士は臆面なく聴衆を打眺め乍ら

皆さん私は淫賣と貴夫人と品行孰れか正しきといふことを演説しまして此の不平演説會よ蒞まれた聴衆よ向て私が不平を鳴しますから宜しくお察し被成て下さい皆さん御存でせうが私達の業即ち異名辻君夜鷹、達摩、舟滿仲提重、地獄と稱へて薄暗き所よイみ行人の袖を引で一瞬の春夢を賣るものとして賤業中の賤業として婦人社會より擯斥されたもので御坐います。是は固と金錢の爲よ肉体を玩弄さるゝからであります……けれども金錢の爲よ肉体を玩弄されましても此は妾達ばかりではありません妾達が陰かよ此の業を致しますものは幾分か廉耻を知て居ますから隠れてするのです然るゝ娼妓などは公然姪を賣て少しも耻ぢないではありませんせんか是な

どは妾達より一層破廉耻なものかと存じます夫れですのゝ娼妓を以て私達よりか品格の好いようにしてありますのは如何な理由が御坐いますか其容色の美なるよ因るのでせうか將た衣服の麗なるよ因るのでせうか否々唯だ税を納むると否らざるとの点よあるのです然れども税を納むると否らざるとよ因て決して其品位を上下する理はありません只だ其廉耻を知ると知らざるとを以て品位を定むるこそ至當かと思ひますですけれど娼妓淫賣の上下優劣を論じますのは即ち五十歩百歩ですが那の權妻と云ふものよ至りましては私達より餘程上等のようよ成て居ります併し金錢の爲よ肉体を玩弄されますれば私達と少しも違ひありません只だ權妻は一人のお客と枕を交はし淫賣は數人のお客よ接するとの違ひですが私達だとして多くのお客と日毎夜毎よ枕を交はしますのは好ましくあり



ませんが妾達の業として一人ばかりのお客では親兄弟を養ふことが出来ませんからです……皆さん考へて御覽なさい誰だつて今意氣な客も出た跡で直ぐ野暮な人をお客にするのは厭嫌ではありませんかそれを忍びます身はどの位おつらく悲しいか知れません併し仕方がないから我慢するのです決して私達が多情なわけではありませんヨ然るよ變通知らずの道徳生噛み先生達は鹿爪らしく正業よ就けなぞと云ひますが中々弱き女子の業では裁縫かマツチの函を貼る位の事です裁縫やマツチの函位の事では一家數口を過すこととは出来ません斯く論じ去り論じ來りませば私達が業は決して無理とは云へますまい又強ち私達が品行の悪いのだとも云へませんチ……皆さん私が羨むでの事でありませんが彼の權妻を御覽なさい二等親と崇められ一等昇進すれば忽ち奥さまと成り貴夫人

と尊稱さる、即ち一等親の候補者でせう然るよその品行の悪いことは擧て數へられません或は鬚殿の眼を掠めて馬丁と通じ又は權那を欺て俳優と交るなぞは常々のことで怪むよ足らぬ位よ成て居ります又その候補者がいよく貴夫人と成上ても猶ほその浮氣は止まず「ハンシーポール」や舞踏會などでの醜聞は屢ば聞くではありませんか是などは徒よ品行の悪いの勿論法律よ問ふべきもので御坐います是は通常貞淑乃夫權妻上りの貴夫人等は已の情慾より法律を犯してさへ世間では誹譏の罪を恐れてかあまり攻撃するものがありません而して私達が已の情慾であく止を得ずして賤業をなしますのは少しも酌量せず酷よ詆罵されますが私は甚だ不平でなりません今申しました通り私達が賤業は糊口よ迫て心ならず致すのです那の貴夫人方の醜行は止を得るので御坐いますか皆さ



ん如何思ひます」ヒヤ／＼／＼

と説て演壇を下ればヒヤ／＼の聲暫時鳴も止まざりける此の時滔々たる天下皆吾が徒なりといふ演題を掲ぐるや否な現はれ出し辨士を見ればその打扮三ツ所紋の黒羽二重の羽織ま同じく黒羽二重の衣服を着て鶯茶の博多帯をしめ右手に扇子を持ちて半ば之を聞き演壇に登と忽ち一聲高く叫びて

「イヨ色男諸君……好男子……隊長ハツテな事で……」

「ライ君彼奴は何ぞ餘程變りものだ也君知らんかな那が即ち野太鼓サフン半ば顛狂して居るようだ

抑も吾々が職務たる幫間とイツパ紅裙緑酒の間よ居て其の興を幫助するものでげすから才子通人は一日も吾々なくんば娛愉快を盡すことは出来ません去れば幫間ハ通人社會を取ては魚が水よ於る

と人が空氣よ於ると全じく少時も缺くべからざるものでケス故よその勳功よ因てお羽織頂戴烟草入結構といふ寸法よ參るのです然るよ世間の子曰連或は頑固黨は吾々を以て太鼓／＼と蔑視し甚しきよ至ては狸なぞと罵り諂諛主義を行ふもの、如く思はれますが是ぞ解せざる理でケス吾々が本業は只だニユーパアなぞとたゞいもなき誹謗を以てお客の機嫌を取るものよて決して客の意を迎へ之よ諂ひ諛ふて田舎漢を指して通と呼び腹裡無一物のお鬚を稱して博學多識の大政事家なぞと吹き立るものではありませんテ然るよ近來は往々幫間社會がその本分を忘れて諂諛主義と化けお鬚の塵を拂ふようよ成りまして大よ吾々社會の面目を汚しました併し幫間社會のみならず兎も角満天下の人が吾々のお仲間入を致しましたは長嘆息の至りであります」ヒヤ／＼／＼那の權ちゃんが檀那の鼻毛



を引張て眞實は壇那は浮氣もんですよ悪らしひとか何とか怒むが如く媚るが如く幫間社會の職權を侵して丸帯か笄の請求などはその害瑣々たることでゲスが那の苟も男一疋よ生れ乍ら權門よ踞踏してお鬚の塵を拂ひ而して高位高官を得るよ至りましては吾々が纏頭やお羽織頂戴とは事違ひ社會よ損害を與へますは幾何か知れませんテ「ヒヤ〜」

「中々能辨だぜ」ナニ多辨と云ふのだ併し夫でも彼等よ似合ず慷慨心がある中が頼もしい

夫れ吾々がお羽織頂戴は酒興を添へ愉快を覺へた功蹟がありますから其報酬と思へば敢て不義だの賄賂だのとは云へませんが那の上官のお鬚を拂て高官を占るのは何の功蹟があるのでゲせう「ヒヤ〜」是はお鬚の塵を拂た功蹟があると申すのですからお鬚の塵を拂

つて自分よ愉快を與へて呉れたと申すなら自分が囊中を探て夫々纏頭を與へて然るべき筈でゲス然るよ其纏頭たる高官の給料は吾々人民より取り立た税で見ませば所謂人の積鼻樞で相撲を取る一件で甚だ狡猾極る舉動では御坐らぬの而してその纏頭お役人は素よりその學識才藝を以て進んだものでありませんから唯その位よ備るのみで伴食宰相が多ふ御坐いませう是などは俗よいふ祿盜人と稱するもので租税の盜賊で御坐ります「ヒヤ〜」斯るお役人が彖進されましては人民は實よ命惑千万でゲす今吾が國などでは藥よしたくもそんな事はありませんかお憐りの支那朝鮮又は幕府時代よは只今申た如き随分幫間よ劣る御人物がお鬚の塵を拂たばかりで高位高官を獲たものがありましたそうです去れば吾々などは其時よ在たなら餘程よき官位を獲る資格を有して居ると申ても敢



て過言ではありますまい(大笑)「開は鬼もめれ諸君の中よは或は吾々  
 社會のみを輕蔑して玩弄物祝し吾々より一層輕蔑すべき上等の玩  
 弄物よ對しては憚々焉と畏縮して其鼻息を仰ぎ乍ら吾々よ對して  
 の畏縮せざるのみならず反て之を蔑視し給ふハコレ如何よ余輩未  
 だその説の在る所を御存なしでゲすバア  
 ヒト／＼「流石幫間は幫間だはあつて吾々が頤を解き臍をぶぐつた哩  
 忽ち慷慨忽ち談話よく罵りよく笑て人を玩弄したナア然り玩弄物よ  
 玩弄さるゝとは反對だハ／＼今度辨士は何者だらう出た／＼「那の  
 縋々縋々たる敝温袍を着て憔悴枯槁として現はれた有様は實よ慙然  
 だナア見給へ彼が襟裏より半風先生が運動して居る必ず王猛氣取で  
 風を捻て天下の大勢を論ずと云ふ洒落だらうヲ、演題が出た何だ  
 ……(乞巧)ハ人よ食を求むる權利あり果して奇論だと罵り合ふを辨士は

恨めしきうは脱み乍ら

「檀那方は私達とは殆んど人種でも異て居るようで御坐いますか此  
 の世界へ生れて来たときより綺羅を着飾り吾達は此の如き縋縋を  
 纏ふて生れましたか」／＼諸君は胎内より財産を有し爵位を戴  
 て居りましたか誰れも生れながらよして富貴のものはありません  
 唯たその父母が世襲の財産を有して居る故その身も富貴なものでせ  
 う抑も造物主が人を此の世よ生しますのは貧富貴賤の別なく平等  
 均一よ自由幸福を與へられたので御坐います然れども世を経年を  
 歴るよ從て人為作用より斯く貧富が別れ富者ますます富み貧者  
 はますます貧しく成りましたので御坐います故よ全しく此の社會  
 よ生れながら富家よ生れましたものは幸福で御坐いますか貧家よ  
 生れましたものは不幸ではありませんか造物主の意は深遠よして



願ひ知るとは出来ませんが彼等は幸を興へ此等は不幸を興へる  
 と云ふような依怙最良はなされずまい果して然らば貧富均一自  
 由平等は造物者の意よして正理かと思ひます然るよ乞巧などは其  
 身が懶惰放逸なるより悲惨の況界に陥たので所謂自業自得已之を  
 招た罪だと唱る論者がありますが是は丸で情理を知らないもの  
 言です那の放蕩遊惰より零落して新よ吾々の仲間に入たものは是  
 こそ自から招た罪で御坐いませうが素より乞巧の家よ生れ落たも  
 のは何の罪がありませんが假設その父祖より代々斯く成り来たよも  
 せよ既よ乞巧の家よ生れたからは職業を仕ようと思ひも教る人な  
 く人よ雇はれんとするも抱手なく車を挽んとすれば鑑札料を納む  
 る能はず又肩買よ成らんとするも資本なし去りとして人間よ視息す  
 る限りは一日食はざれば忽ち飢餓といふ敵よ攻められますから止

を得ず、ツナ等の函二二三を携へ之を賣るを名として一厘二厘を賣ひ  
 歩き儘よ生命を繋いで御坐います然るよお房さん育ちの人々又は  
 妻上方は斯る悲惨の況界を知りませんで諺よ乞巧を三日すれば忘  
 れられずとて悲惨困苦の身よ撤して忘れられぬ事を云つたのを乞  
 巧は心配なく一日同伴して居て氣樂なものぢやと誤解して居られ  
 ますが試みよ一日乞巧よ成て實際して御覽なさいよくその苦樂が  
 知れますから

君彼はつまりらぬ察言を云て居るぢや無いか然り一厘位呉れて遣るか  
 ら早く演壇を去ればよい、ソウくと、シイ、の聲で逐拂て遣らう  
 借て吾々乞巧は資本なく職業なくして詮方なく乞巧と成りました  
 のですから若し政府よて之よ應分の職業を興へられましたら誰  
 れも好んで乞巧をするものはありますまい、諸君も定めて御覧なせ



うが近頃英國よては吾々社會が多人數相集り「職とパン」と記せる旗  
 を押立て「トランプルガ」の廣小路に會して示威運動を試み夫よりま  
 すく過激に涉り遂に警察官吏と激戦し及び倫敦の一騒動を起し  
 たではありませんか羅馬帝國滅亡の前には矢張賤民が斯る舉動し  
 及び千七百九十三年佛國巴里にも全様の企をなしたと云ひます彼  
 の現今歐洲よて尤も恐るべく忌むべき社會黨虛無黨の如きも乃ち  
 貧富を平均して財産の分配を謀るものでありますから其方法手段  
 の兎も角その主義に至ては決して排斥すべきものではありません  
 否を吾黨よ於ては大喝賛成致します然るも社會黨虛無黨と云  
 へば一概に破壊主義だと心得て蛇蝎の如く思ふ人がありますか  
 私には二黨の精神は決して左ようなるものではありますまいと存おま  
 す併しその徒が條例などの爲に壓制せられその反動よりして過激

の舉動を爲しますのは是れ當然の勢で御坐りますと云々く歸らば  
 此等の徒を未然に防がんとしますよは吾々貧民は職業を與へるか  
 左なくば之を救恤するより外に策はありますまい又人民よても吾  
 々社會を救恤するは富民の義務かと思ひます何となれば造物者は  
 人々よ生活すべき丈けの物を均一に與へられたのを人為作用によ  
 りて一方よ多く奪ひ取た故斯く貧富の別が出来たので御坐います  
 から富者は徳義上又理論上よ於て貧者を救恤すべきものです今一  
 歩進んで云へば富者は貧者より奪ひ去た所の物を返すべき義務  
 あるものです「ソック」斯達頓氏が權理論「ノルスマン、マレー」よ  
 ての乞丐が救助を受くるの權理ありと思考し居ると云はれました  
 が是は左もあるべき事と思ひます併し生存競争の理よ因て優勝劣  
 敗上より勝ち得たるものだから人を救ふべき理なく又人を踏み倒



まても已れさへ利あれば生存競争の理よ適ふたものだと思ふ人よ  
 鬨ては勢ひ非常手段を用て吾々が權理を暢張しなければなりません  
 まい吾々は願くは諸君が社會黨虛無黨よ鑑みて吾々をして非常手  
 段を用ゆる如き不幸無からしめんことを希望致します  
 と演じ了れば悲哉ノワくの聲のみよて一人の賛成者なかりければ  
 乞丐辨士は不平面よ現はれヒヨロ／＼として僅かよ演壇を下りしが  
 見るも哀れ敢果なき有様なりき此時香水の香芳然として聴衆の臭官  
 を穿つよ人々眸子を定めて之を見れば年の頃ハ十六七よて東囀よ白  
 薔薇の釵を挿して喉よハンケチを巻き大編の南部の小袖よ黒羽二重  
 の羽織を着て赤色の靴下を穿きたり君那の美麗貴女を見給へ成程頗  
 るものだぞんを演説をするだらうソラ演題を掲出したゼイヤ是は黙  
 して居れん自由結婚を論ずると云ふ題ヲ君是ことを聽きものぢや實は自

由結婚大の主張者だが那の貴女と全説とは僕よ於て悦ばざるを得ず  
 サ定めて彼も僕の如き才子と自由よ結婚したいと云ふのだらう……  
 「自負も亦甚しい君即ち及ばぬ戀の片思ひ堅固云へば非望を覬覦する  
 と云ふのサ」と頷りよ喋々して辨士の顔のみ見詰居るを辨士は左もこ  
 そと自慢顔して

滿場の聴衆諸君よ妾は試よ諸君よ向て此の社會よ生れた人類か一  
 日も之なきときは其幸福安寧を保すること能はざるものは何物で  
 ありますかと質問しましたら諸君は必ず一齊よ自由と叫び給ふと  
 信じますヒヤ／＼諸君人生の幸福を保持するものは此の自由の外  
 よは何物もありませんよ故よ言論自由と云ひ集會の自由と云ひ自  
 由貿易と云ひ事々物々自由ならざれば不快を覺へ苦痛を感じます  
 から一も自由二も自由と云ひますけれども諸君も知らるゝ通り此



の自由とは吾儘勝手の絆ではなく人々の妨害まをらざる限りは自  
 己が権理を張り通すので御座ります是の爰で妾が事奇らしく自由  
 論を説きませんでも諸君が百も御承知否を諸君が常々主張する  
 所だと思ひます然るゝ獨り結婚の自由に至ては餘り唱説する人が  
 ありません是れ妾が大に疑ふ所です……抑も人生至大至重の關係  
 は男女の間は在て合へば利あり合はざれば害ありて其合と不合と  
 より生ずる所の利害は一身一家に關し又社會一般に關して廣大無  
 邊のものです然らば男女嫁娶の事は互々意氣相投を是ならは終身  
 苦樂を共にせよと云ふ即ち好いた全志でなければ琴瑟和合とて  
 一家の圓滑を望むこととは自來ますまい左すれば從來の壓制結婚を  
 廢して自由結婚に仕なければ成せせん是まで吾國では結出と稱へ  
 て垂誓の項より親と親とが成長の上は結婚とすべしと約束します

が是は道理は断々人情は圓々でも戻て居ります好しその子が成長  
 して雙方意氣相投をせば僥倖でありますけれども若し相思み嫌  
 ひましても仕方なく結婚致ます故に斯る夫妻は互々一生を不快に  
 送り夫婦の情愛を往々家内の風波は絶へません壓制結婚の害は  
 既に此の如く人生の自由を奪ひ幸福を害ふは此上なき事であら  
 ず極る仕打で御座います之を反して英國などは至て結婚の自由を  
 國で假令親々が氣ま入りましてとて其子が承知しませんければ決  
 して結婚させることは出来ません又親々が承知しませんでも本人  
 全志が意氣相投して結婚しようと思へば寺院或は婚姻登録所へ往  
 てその証を留めてさへ貫ひませば親々が嘴を容れて苦狀を鳴すこ  
 とは出来ませんとサ是は左もあるべきことで吾が國をぞと較べる  
 と大變な違です斯く自由結婚の行はるゝ國に生れた少年小女は嘘



と嬉しう御坐いませう實は羨ましい話でありませんか「ヒヤ／＼」  
 只今申たは變則の結婚ですが正則の結婚でも當人達が互に意氣相  
 投じ親達も那人ならば嫁に遣らう貰うと思ひませば親々が先づ友  
 人として交を結すば互に手を携へて夜會など淫み又花見遊山  
 などよも二人して出掛け夫れから愈々大禮を行ひますそうですが  
 其既よ友人たりしとき既よ當人達は那の……「ヒヤ／＼」若し之を壓  
 制結婚の日本人などよ云はせましたら私通とか穴隙を鑽るとか謀  
 誘するよ相違ありますまい東西人情を異するとは云ひ乍ら斯くも  
 人生の幸福よ雲泥月露の相違があるとは實は長嘆息の至りです妾  
 は自由結婚論の勢力なきよ就きまして熟ら反對論者の心事を窺ひ  
 ますよ彼等愚ら自由結婚が果して行はるゝときは吾々の如き妻  
 となる輩の中より顔を出せし醜男子は自分では正か醜丈夫と思は

ぬとも知りませんが到底嫌厭たる小女を擁することは出来まいと  
 嫉妬心を起さでの事がと疑ひます左なくば自由結婚の正理よ向て  
 攻撃すべき敵はあるまいと思ひます「ヒヤ／＼」又自由結  
 婚を許さば日本などよて充分の教育が行き届かぬから風俗を亂  
 すとて尙早論を唱へる人がありますが假設誰れよても互に相信じ  
 互に相愛し一生幸福を共よして借老の契りを結ぶべきと意氣相投  
 じた全志ならその結婚を自由よさせたとて強ち淫逸に流れ風俗を  
 亂すとも限りませぬすまいテすから妾などは假令へ親が許すまいが人  
 が許りませうが妾が愛する所の人よして又妾を愛する福ちやん其  
 人の如きものと……

と云はんとするるとき満場破るが如く淫奔阿魔奴と叫ぶものあれば此  
 の畜生と罵るものありて中よは烟草盆などを擲付る亂暴眼籍に流石



の辨士も顔赤めこそくとして退きけるアレダもの中々容易よ自由  
 結婚などが許せるものか若く許したら何んを醜態を現はす知れない  
 「君は先刻自由結婚を主張して居ると云ふたではないか而して彼の辨  
 士が編ぢやん云々と云ふまでは聲を枯してロヤ／＼とのみ叫び乍ら  
 忽ち主義を變じて反對説を唱ふるのは矢張り辨士が所謂嫉妬心より  
 起ての事だ」君は大層彼を回護して僕を攻撃するも君いくら彼を贊  
 め彼を媚びても無益だ斷念し給へ「それは君自らが事だ」と例の如く二  
 人の書生の罵り合ふて居たりける次よ現はれ出し辨士は何者ぞとそ  
 の打扮を見れば古渡唐棧よ全じく古渡の羽織を着て茶博多の帯をし  
 め中々意氣を振へなり辨士が舉動は餘程の世故よ通ぜしさまと見受  
 らる頓て辨士は聴衆よ向ひ

私は愛お掛けでありませぬ相場師は正業よあらざる態と申す間

愚よて身障を堪へ諸君の聽を煩はします私が私は性來甚だ訥辨で御  
 坐いますからノウ／＼充分私の説を吐露することは出来ませんが  
 所謂余餘りありて辭足らすとか申すの故宜しく御酌量を願ひます  
 借て私共の營業たる相場は人々皆な一六勝負即ち賭博の如く見做  
 して正業でないようよ云はれますが果して此の相場は正業であり  
 ませんか若し相場が正業でありませぬければ天下の商業は悉く正  
 業でありませぬナせ相場が正業でなければ天下の商業は悉く正業  
 でないかと云ふよ此の相場師の自己の經驗と才智とを以て明日は  
 風吹くべし或は天氣ならん去れば賣る方利よして買ふ方損なりと  
 か又の買ふべくして賣るべからずと推測して之を賣買しますもの  
 ですから一寸賭博に類似して居ますけれど決して之を一六勝負と  
 見做ことは出来ませぬ何商買でも此の物品は必ず騰貴すべく彼の



物品は下落すべしと各見込を立て買込み又は賣拂ふは商業上の原則でありませう何商賣よても此原則は反しませば必ず失敗を取ら定て居ります相場師とても此原則は因る者ですから決して不正業だとは云はれません若し之を不正業としませば目的を立て賣買するものハ皆不正業と云はなければ成りません「ヒヤ」是は因て之を視れば商業ハ幾分か賭博の分子を含蓄して居ると申ても強ち妄論とも云へませう「ソウ」彼の歐羅巴人が公然博奕をなして敢て耻ないのは職として此の理よ由るので御坐いませう

「君那此相場師が經濟論を擔ぎ出したせ併し一應理なきよもあらず「イヤ」那の空米相場の如きはその名あつて實なきものだから通常商業上の掛引とは同一論じられん彼は希臘の犬儒學派か支那の公孫龍連を頻り「白馬を唱へるが到底論理は適はぬ説」

「今一步進んで論じませば商業上のみならず政務上よ於ても賭博の性質を含有して居ると申しても敢て証言ではありません何となれば甲の政黨と乙の政黨とが政權を争へば互よ之を押倒さんとして種々の策略を運らじ其勝負を決するではありませんか是等は政權といふものを注射して勝負をするので御坐います是は歴史よ徴して昭々疑ふべからざる事實です又一步讓て相場は賭博よして危険なものよて破産の憂があるから之を禁じなければならぬと致しませうか然らば政黨の賭博即ち争ひよ至りては一國の安危は關係するものです「ソウ」併し政黨の争は則ち公よして所謂君子の争ひなれど相場の如きは私よして一日の利を射るものだと云ふ人がありませうが政黨の争とても決して公なりとのみ申すことハ出来ません是は少しく政論よ意を用ふる人



の皆御存じですが彼の文明を以て鳴る米國などまでも自黨が勝を  
 占めんとして卑劣手段を用ひ投票などを賣買すると云ふことは往  
 り承て居ります是などは私といふより外のありません然るも世人  
 は相場のみを酷く誘りて一六勝負なり賭博なり徳義を紊し風俗を  
 壞り社會よ害を爲すものだと論じられますが若し相場が徳義を紊  
 し社會よ害を爲すなら政黨が公正の争を爲さずして私を用ふるは  
 徳義を紊し社會よ害を與へぬのでありませうかソレは是等の政  
 黨は公共の益を計るよあらず又輿論を以て勝敗を決るよあらず  
 陰險手段よ因て勝負を決するのですから真正の政黨とは云われま  
 せん併し望むたる真正の政黨でも互よ政權を賭して自黨の主義を  
 行はんとしまする点は賭博の性質を有して居るではありませんか  
 去れば色が主義を達する目的を貫徹する爲よ争ふものは幾分か賭博の

分子を含蓄して居ります故よ相場を賭博なり不正業なりとしませ  
 ば呉服商も唐物商も盡く賭博よして政黨の如きは最も賭博の大な  
 るものです(喝采)

此時辨士は一層聲を剛まして  
 然らば滿天下賭博の範圍を脱するものはありません而して此の賭  
 博の性質あるものは不正だとしませは恐くは社會よ不正でなきも  
 のはあるまいと考へます

と演じ了れば喝采の聲と拍手の音よて滿場湧が如く見へたり「ライ君  
 那の相場の説の客よして其主却ち政黨の弊害を論ずる精神であつた  
 のだらうか否々な矢張聽衆の喝采を博し世人が相場を不正とするか  
 否やを試したのぢやらう」然らば彼が此の演説も亦賭博の範圍だとな  
 らく」と打笑ふ此の時皆さん御免なさいヨ」と遠慮なく聽衆の中を



通つて演壇より上る辨士を見れば髪は銀杏返しに結び顔は白壁より口  
 を画きしかと疑ふばかり白粉を惜気もなく塗り付け二ツ子織の大綱  
 の衣服は綿南部の横堅の羽織を着偽博多と唐縮緬の腹合の帯は黄八  
 丈の前掛をしめたり「ライ君神明の的が出現まし」たゾ是は厄介な  
 事が起た見られては堪らんゾ君いくら帽を深く被ても君が候補のな  
 い薩摩がすりの羽織を知て居るから無益だ糞う失敬な……  
 チヨイと皆さん……

「イヤいよく大變だ鈴木さんお寄なさいよ素通は成りませんと例の  
 如く喋舌るのホナ驚き入るチ

妻は「目的を二三よする勿れ」といふ私達が「大關係のあることを演  
 説しようと思ひますが皆さんも亦此の演題には大關係があらうと  
 信じます」ソレソレ「總べて何事を成しますよも先づ第一目

的を定めて取りかゝることです若し目的を定めなければ決して何  
 事よても成就することはありません假令へば片足はお花見も往う  
 まして東に向ひ片足は劇場へ往うと北に向へば何處へも往くこと  
 は出来ませんそんな事は皆さんが百も五承知で居ながら往々その  
 方向の定まらぬ人がありますから可笑しう御坐います「那の私達  
 の處へ遊びよ来る經師屋連否お客さんは何を目的でお出でなさ  
 るのですか玉突や何かと全く遊興の爲よ弓を引てその的を射ら  
 る、までの事ですやうソレソレ然るよ世間では私達は螺旅形の的の  
 外何か一種特別軟柔的の東西を射さするようよ言ひ難し又私達の  
 所へ張りナアよ引よ来るお客も亦夫が目的だと云ひますが然らば  
 その目的とは如何なる東西を指すのですか……

「ライ君今の一言を聴たか彼れ自らよく知て居るから白ぼつくれ



て實に狡猾極るぢやないかナニ狡猾のものか正當の言だ嫌に辨護するぜ

妾は熟ら諸君が的を射給ふを見ますよ一意眼睛を的に注がずして  
 反て私達の顔のみ狙てお出でなさるから常よその射出す矢は鈍々と太鼓のみ當て的に當ることは稀れであります此の如くして  
 的を射んとせば爲朝揚由基をして起たしむとも正鵠を穿つことは出来ずまい是れ他なしその目的を二三よするからでサア子諸君が目的は全く此に在て彼よあらずと云ふのなら二箇の必要物がありますその二箇の必要物とは何だと申せば則ち第一は黄白第二は容貌です併に第二は缺くとも黄白よは吾が自由を擲ち甘じて奴隷となります此の卑屈意氣地なき世の中ですから大抵第一のみよて目的を達せませうアすけれども少しく氣慨あるものは矢鱈無性よ

黄白の犠牲よは成りません然るも矢取女は十把一とからげよ誰れでも自由よなると考へ揚弓を名として遊びよ来て僅か十銭か廿銭札の一枚も置いて一舉兩得の策を試みる人が多ふ御坐いますかなれば物價が下落したからとて正かそんな廉なものに恐く鉄の草鞋を穿て搜したとてありますまい故に妾は諸君が目的を一方よ定めて之を二三に成さらぬよう諸君の爲に忠告します併にその目的彼に在りながら憚りてその名のみ籍り他の目的を遂げんとするもの秘達の處へ来るお客ばかりではなく踏々たる天下皆な然らざるもの御坐いません彼の一國の政略よ至てもその名のみは英を取てその實は獨を取むるようで更よ政略の目的が定まらぬ國がありますか箇様の國はその政略の方針を社會に表明して貰ひたう御坐います……



と銀鏡を以て演台を鏘と叩きて下ればヒヤ／＼ノウ／＼の聲よて例  
 の二人の書生の談話を奪ひしが頼てその鳴の静ると見へ君彼か阿賭  
 物が必要ぢやと云ふに至てはいま／＼彼等が本色を顯はした否を化  
 の皮が現はれた彼が言ふ所は道理だ君まぞは時よ十錢札の一枚も置  
 けば十圓も呉れた了見で有丈の烟草をふからし加之茶の三四度も入  
 れさせ櫻の湯を入るれば花までムシヤ／＼喰てその癖せ情夫氣取を  
 するからサ君は△△新聞が△△の事なら一も二もなく褒め立てるとよ  
 く似て居る定めてそう諛ふたら幾分か保護否惚れられるだらうヨと  
 互よ苦戦の最中吾々の職業を奪ふものは誰ぞと云ふ演題を掲ぐると  
 全時よ演壇よ上る辨士は縋縋半縋よ半股引を穿き一枚の鑑札を前よ  
 プラ下げたり那の辨士の頼て説き出して

嗚呼悲哉人類外擯斥された横目豎鼻の動物は即ち人力車夫です

私達だぞと素より人間の形体を有し乍ら好んで牛馬の仲間よ入た  
 のではなく喰へないから止を得ず斯る卑しき働きをするので御せ  
 いやす然るよ堂々たる人々が計畫して私達の懸れ果敢ない業を奪  
 て恬然として文明の事業だとか國益だとか云て誇るのは何事でせ  
 う此の無慈悲剛愎な吾々が讐敵は何物だと申せば言はずとも知れ  
 た鉄道又は馬車會社です是らの會社は皆吾々賤民の業を奪ふて壟  
 斷するものよて即ち吾々の命取です尤も鉄道などは有無を通じ智  
 識を闡發し開明世界よ缺くべからざる者までそ此利益あるは無論  
 ですが鉄道會社や馬車會社や或は水道會社などは皆獨占の事業よ  
 してその利益は少數の人のみよして天下多數の人は其の利益を受  
 ることは出来ません又此の鐵道が蜘蛛の巢の如く網の目の如く縦  
 横よ出来水道が地軸を鑿ちて經の如く緯の如く少しも明き目なく



便利が宜く成て適れ文明國の如き觀を爲しませうが幾万の貧民が  
 之が爲よ業を失ふて父子兄弟離散し餓卒道路よ横たなら波蘭か埃  
 及か否らすんば土耳其と一般よて決して眞の開明とは云はれませ  
 ん然るよ外面の修飾のみ嬉ぶ人は動もすれば吾々を目して野蠻風  
 だとか不体裁だとか或は他國よ對して國の面目を失ふなどと云て  
 吾々が業を絶滅せんと種々の口實を設けて居ります今その論者の  
 言を擧げませば凡そ動物の保存養育の模様よ變化なきときは子孫  
 よ至るもその稟性同一なれど若しその間保存養育の模様よ變化あ  
 るときは其の骨格形状のみならず天稟の氣質よ於ても變化すべし  
 故よ人類も亦その遭遇の變化よよりて形貌は知らず氣稟よ於ては  
 必ず變化を受くべき理なり果して然らば苟も彼の牛馬の職たる車  
 夫となるときは形骸既よ牛馬よ變ずるものたらざるべからず形骸

既よ牛馬よ變ずれば即ち心性氣稟も亦牛馬よ變せざるを得ざるべ  
 し是れ豈よ外人よ對して耻づべきよあらずや然るよ幸ひ鉄道事業  
 の擴張するよ從て彼等の業漸次衰へて終よ消滅よ至るべし是れ徒  
 よ外形上のみならず人類をして牛馬と伍せしめず人類たるの本分  
 を失はしめざるものなりと此の説一應理なきよあらざれども數万  
 の車夫が業を失へば全時よ他の業を求めなければ成りません而し  
 て今我國を見渡しますよ吾々勞力社會が爲すべき業がありますか  
 私達は決して有るまいと思ひます果して私達が思ふた通り勞力を  
 用ふべき道がありませんければ鉄道會社の如きハ數万の車夫をし  
 て路頭よ迷はせ竟よ吾々をして乾干よするものです併し公利公益  
 の爲よ懸然乍ら吾々が業を奪ふとならば先づ預じめ吾々よ他の就  
 くべき業を與へなければ成りません抑も吾々が勞力は即ち無形の



財産であります然るも有形の財産を奪ふは法律よ問はれますが吾々が無形の財産を奪ふは法律よ問はれんからと云つて奪ひ放しとは實に徳義の罪人ではありません歎ロヤ／＼又吾々を指して牛馬の業だと罵り乍ら堂々たる人々が牛馬の食物を強奪して自ら之れを喰ふとは言語同断の語で御坐いますロヤ／＼且つ吾々を以て既よ形骸牛馬よ變ずると言ふ吾々が業を奪ふは取りも直さず牛馬の食料を奪て之を喰ふと全前です然らば牛馬と齊しきものよてその氣稟も亦牛馬と變じませう否な牛馬より一層狼戾なものよ成りませ併し人は万有動物を食とするものだから牛馬の食のみならずその牛馬まで喰ても構はぬとさせうか縦令ば爰よ一人の童子がありまして果物を喰ふて居ると假定させう而して突然此の童子の果物を奪て喰ひましたら柔弱なものならば悲み泣きて止みませう

が勇氣あるものならば怒て瓦石でも擲ちて抵抗しますは當然です況してや無智なる牛馬の食を掠めませば勢ひ暴れ廻るよ極て居ます然らばその形骸氣稟既よ牛馬よ化したる吾々が食物を奪ひ取らば吾々は牛馬の如く暴れ廻らざるべからずです其時吾々を責るよ人たるの理を以てすることは出来ませぬ故よ吾々をして人類の体面を失はざらしめんとすれば爲すべきの業を興へなければ成ません若し否らずして徒よ吾々が業を奪ふのみよて之よ業を興へませんければ彼の乞巧辨士が論じられた如く我が東京へ倫敦の貧民一揆を輸入し來らんも計り知るべからずです霜を履で堅氷至る天の未だ陰雨せざるよ牖戸を網纏せよとは之を未然よ防げと云ふのでせう請ふ諸君察し給へ

と車夫よ似氣なき悲愴淋漓の演説なれど何故か場中ゴト／＼しけれ



ば辨士のますく不平の面色よて演壇を下れり引續て現はれ出し辨士は又もや木綿のはぎくの半纏よ同じ藍色の泥よ染みし股引を穿ち淺黄絞りの手拭を腰よ下げたり此の辨士が面色如何といふよ烏をも欺き亞非利加の黒人種も殆んど三舎を避くる計よて此の辨士が演壇よ登ると忽ち臭氣粉々として聽衆の臭官を裂きければ人々皆鼻翼を摘みて演題を見れば鎮守の祭や村芝居は豊年の兆よあらざと記せり辨士はキヨロく聽衆を打眺めつゝ

ハア私は諸君よ伺へやすが都會のお人は盡く陶朱猗頓ワンテルピルトの大金持か知りましねが祭禮など云へばエレイ立派よ飾立て騒ぎ散らし又月よ何度もヤレ芝居だのヤレ相撲だの寄席だのと遊び廻て巨額お金を遣はつしやるが私等の如く鎮守の祭や村芝居を見て此上もなき歡樂として居るものは魂消やす然るよ誰れも之

を金融がい、からだの贅澤だのと論ずる人はあらつしやるめい然るよ私等は朝は星を戴て出で夕月を負ふて歸り粒々辛苦の氣齧よ僅か年よ一度位の鎮守祭か或の村芝居でも興行すれば忽ちヤレ今年は百姓が奢り散すのら豊年だ田舎は景氣が宜いなど、唯し立られやすが村芝居を興行したからと云ふて決して豊稔ぢやとは云はれまし子へ何となれば都會のお人が相撲や芝居へ往かつしやるツても強ち都會一般は景氣が宜いとは申されませぬへ夫れだも私等が村芝居の一ツも興行すれば大層仰山よ田舎は景氣が宜い豊年ぢやなど云はつしやるが私等だとして全人人間だ年よ一度位の氣保養をしたからと云つて奢り散すなぞと云はつしやるは餘り過酷な事では御座りましねエか是れ所謂己を待つことの軽くして人を責るの重きと申のです是れ私が今日不平演説よ參りやして諸君よ



問ふ所以であります既よ述へやした通り鎮守祭や村芝居の興行を以て田舎が景氣が宜いなどと地方の情を知らんで嘸し立てますから今ではありまして平へが昔しなどは何程百姓が究困して減租を請願しても皆却下されて地方は景氣が宜いから豊稔ぢやとてますく税を重くして軽くはさつしやりましたねへ是れその原因は諸君が地方の情を知らないのとお役人様が下精よ通じられんからの事で情けない譯けでは御坐りましたねへか夫れ故一時地租金が差支へることもありますが是は百姓等が横着で上納しないのだらうと猜察するお役人などが今ではありませんが昔しなどはありまして御成規とは申し乍ら祖先より持來の田地田畠も些少の上納金の爲よ直様沒收今ならば即ち公賣と申す御處分を受けますが實よ憫然の譯けではござりましたねエか謹聽く私等が村の源右衛門どんなどは地

租金未納の爲よ公賣處分よあふと聽き先祖傳來の田畠を失ふては祖先へ言ひ譯けがないとて一人娘のお芳こを驛場のお女郎よ賣て稍やくその金を調べて上納よ出懸けやしたら既よ入札人よ賣渡したとて何程取消を嘆願しても御取り上げなく終よ公賣の御處分よ成りましたが實よその慘狀ハ都人士の夢想せざる所ですと泣水ばなど共よ下りければ滿場蕭索として時々聽衆の中より嗚呼と嘆する聲を聞くのみ辨士は猶ほ語を繼ぎ

尤も時々大政府から民情視察として高位高官のお方くが八らせられますが大抵縣廳或は警察署小學校等のみを御巡視なさるゝまでよて駄味間の茅屋を御巡回よ成て實地悲惨の有様を御覽せらるゝことは稀です且つ縣下の市街は高官の御巡視と聽けば干渉があつての事か知りませんが國旗を掲げ毬燈を張て五穀穰々万民鼓腹



どの意を表しますから切角の民情視察官も充分地方の内情を御探  
 索なさるまでよ至らずして御歸京よ成ります斯る次第ですから政  
 府の施す所ハ人民の害となる所となり政府の好む所は人民の好ま  
 ざる所となりその利害の選庭します所から遂よ上下丕塞して上意  
 下達せず下情上達せずして或は官民の軋轢となり甚しきよ至ては  
 竹槍席旗などの騒動を惹き起すよ至りましたは既往の事實よ徴し  
 て明かて御座いやす是れ畢竟するよ都人が繁華の地よ居て凄涼た  
 る地方の情を知らんからです請ふ丈の知れたる村芝居の興行など  
 を目して地方は豊稔ぢや好景氣ぢやなぞと誤り信して其結果竟よ  
 吾々をして悲惨の境界よ陥れて下さつしやるナ……

「百姓は百姓だけあつた何だか味ふ否黽と臭さうな所がある哩いソウ  
 彼等は昔しから泣く子と地頭よは勝れぬと卑屈よも諦め居たよ反し

て自分の所存を憶せず憚からず此の不平演説へ擔ぎ出した所は感心  
 サイヤ非常な辨士が出たぞ成程是は尤物だ所謂花顔月眉雪膚柳腰楚  
 々嬢々人を動す揚妃も之が爲よ鏡を掩ひ太真も之が爲よ顔なからん  
 と賛しても溢美よあらずぢや君は頻りよ容貌を褒めるが僕が望は君  
 と違て居る然らば君が望みとは……僕が望むは彼が衣服サ君那んち  
 服を何よする都盛ぢや君も究して居ながら随分迂活だ天保時代よ生  
 れよば好し迎も狻猊世界よ立つべき人物ぢやないテナせナせと云よ  
 見給へ那の頭の珊瑚の古渡玉の付た金あしの簪よ金無垢の櫛と黄八  
 丈の小袖と黒縮緬の羽織よシツチンの帯ときては之を踏倒しよ典じ  
 てもウエプストルの字書三四冊位の價直は充分あるからサ若し那の東  
 西があれば先づ債鬼の攻撃を驅逐して二三回は的の所へ往かれるか  
 ら流石有名な狻猊家だけあつて實よハヤ威服の外なしと各その地



よ因て感情を異よし那の辨士を見てあれば辨士は昨日髪を洗つて油  
 氣なしの達摩返しよ金股の管を留めよ挿し玉の如き手を以て髪かみの毛  
 の二三本垂れかゝりしを拂ひ乍ら嬌婉せうわんなる聲音こゝろねよて

妾わがしは(一夫一婦)と云ふ演題よて妾が所思を述べて諸君のお聽きこを煩わづらは  
 します皆さん御存の通り一夫一婦といふ論が世よ出ましてから各  
 國學士達の嘖々唱道する所となりまして少しく學問あるものは一  
 夫一婦論を以て正理としませんものは御坐いません英の鴻儒斯邊  
 鎖くわいが有よ公道は男女の別を知らず人たる文字は之を解するよ概通  
 の意義を以てして特別の意義を以てすべからず同等自由の法則は  
 人類の全体即ち男女よ適用するや明けし云々と云はれましたが實  
 よ男女全權は万世不易の公道かと思ひますアノ男子と女子とは其  
 体格たいかくこそ違て居りますすが其能力のうりよく識覺しきかくは男子よ劣りません今その一

例を挙げませば才學さいがくよは朗蘭夫人實節徳あり勇力ゆうりきよハ巴板頓はばんとんシヤ  
 ノマークノマークなどがありまして枚舉まいきよよ違まありません且つ内外國よ女  
 帝女王があつて男帝男王と異らないでは御座いませんか然らば男  
 女の權よ差等あるべき理はありません男女の權よ差等なくして男  
 女全權が公道なりとしませば一夫よして數婦を擁ようしますのは婦人  
 の利益を奪ひその權理けんりを削ぐもので御坐います妾わがしは今斯邊鎖鎖すべんさ氏が  
 説を擧げてその利害のある所を証明しませう斯邊鎖鎖すべんさ氏の言よ曰く  
 一夫よして二婦を擁ようするとき一人の男子の利益りやくよ浴よくする爲よ二  
 人の婦女の利益を減損げんそんするものなれば斷じて女子の爲よは之を有  
 害がい無益むえきのものと謂はざるべからずと云はれましたが實よ男子のみ  
 快樂を得ても女子の幾分か共有きゆうぎすべき其快樂を減損げんそんしなければな  
 らんとい偏頗へんぱん極る譯では御坐いませんか「ヒヤク」



二君所き給へ那の美人辨士は快樂を減損さるゝとて不平を鳴すが僕は  
 その快樂を満足として遣らうか君の鉄面皮よして多情なのよは僕も  
 驚き入るテ人よして情慾のないものがあるものか人生の快樂は肉交  
 の情味よ勝るものなしサ然るゝ外面を繕ふ爲め劣情だとか何とか唱  
 へるものがあるがその心臓を解剖したら丸で口と心と反對だらうと  
 思ふ君諺よ色好きぬは玉の盃底なしと云ふ格言があるぢやないか  
 ア喋舌すと辨士の説を聽き給へ

又全氏が言ふ此の惡制を許すときは其弊は忽ち貧富不平の大害を  
 増長せしむ夫の素封家の如き己れが富財を以て自餘の人民を壓倒  
 せしものは此の惡制に依て益すその勢焰を盛んよし遂に底止する  
 所をかるべし何となれば貨財に富める所の男子は恣に貧家の女を  
 娶りて自由な籠絡の計をせむ他の男子の希望を杜絶し又その女は

數人よして一夫よ嫁して一夫一婦の歡樂を受ること能はず到底内  
 外怨女曠夫の多きよ堪へざるべきなりと論じられましたるが實に數  
 婦の一夫よ嫁する弊害は舉て數へきれましますまい妾などが現は此の  
 惡制よりして一婦一夫の歡樂を尽す能はず富者の爲に壓倒せられ  
 思はぬ人よこの身を委せて貴重の自由を奪はれたので御坐います  
 若し法律を以て此の惡制を禁じましたら縱令父母が利慾に迷ふ  
 てその子を黄金の犠牲に供せんとし又富者が如何なる籠絡手段を  
 施しましても法律は違背しませうから勢ひその罪人たるを懼れて思  
 ひ止りませう又此の社會は一夫よして數婦を擁する惡制がありま  
 すとき婢妾たるものは勢ひ競ふて郎夫の歡心を買ふと思ひ他人  
 の寵愛を奪つて己が寵愛を得んとのみ務むるよ至り遂に男子の威  
 權を増長させますく男女不同權の邪説をしてその氣焰を盛んな



らしむるよ至ります加<sup>しか</sup>之<sup>の</sup>此<sup>の</sup>の如くなるとき婢妾の嫉妬<sup>しやうと</sup>纒<sup>ま</sup>搦<sup>り</sup>より一<sup>いっ</sup>家族<sup>かぞ</sup>の和<sup>わ</sup>平<sup>へい</sup>を擾<sup>じやうらん</sup>亂<sup>らん</sup>してその衰<sup>すい</sup>亡<sup>び</sup>を招<sup>まね</sup>きまじた事實は那<sup>かの</sup>の歴史が保<sup>ほ</sup>證<sup>じやう</sup>よ立<sup>た</sup>て居<sup>ゐ</sup>ります一<sup>いっ</sup>夫<sup>ふ</sup>數<sup>すう</sup>婦<sup>ふ</sup>の弊<sup>へい</sup>は既<sup>すで</sup>よ此<sup>の</sup>の如<sup>ごと</sup>くだから徳義の勢力が法律の威力<sup>かうりき</sup>よ依<sup>よ</sup>て禁<sup>か</sup>止<sup>し</sup>しなければなりません借<sup>か</sup>て此<sup>の</sup>の一<sup>いっ</sup>夫<sup>ふ</sup>一<sup>いっ</sup>婦<sup>ふ</sup>と男女同權説とは密<sup>みつ</sup>着<sup>ちやく</sup>の關<sup>かん</sup>係<sup>けい</sup>がありますから又女子が權利のよ付<sup>つ</sup>て一<sup>いっ</sup>言<sup>げん</sup>致<sup>し</sup>ませう那<sup>かの</sup>の一<sup>いっ</sup>夫<sup>ふ</sup>數<sup>すう</sup>婦<sup>ふ</sup>は男子のみ權ありて妻妾の權なきが常でありますが時よは妻妾の權その夫より強<sup>きやう</sup>大<sup>たい</sup>なる一種不思議の現象を呈<sup>てい</sup>することが御坐います<sup>が</sup>是<sup>は</sup>其<sup>の</sup>夫<sup>が</sup>妻妾よ感<sup>かん</sup>溺<sup>てき</sup>し自<sup>みづか</sup>らその權を剝<sup>は</sup>いで之を妻妾よ讓<sup>じやう</sup>與<sup>じ</sup>しましたのでありま<sup>す</sup>す彼の章<sup>しやう</sup>台<sup>たい</sup>よ流<sup>りゅう</sup>連<sup>れん</sup>し梁<sup>りやう</sup>苑<sup>えん</sup>よ沈<sup>ちん</sup>溺<sup>てき</sup>して頻<sup>ひん</sup>りよ容<sup>よう</sup>媚<sup>めい</sup>を求<sup>もと</sup>め唯<sup>い</sup>々<sup>た</sup>諾<sup>た</sup>々<sup>く</sup>巾<sup>きん</sup>幘<sup>てき</sup>の命<sup>めい</sup>之<sup>の</sup>れ聽<sup>あ</sup>き恰<sup>あ</sup>も愧<sup>くわい</sup>備<sup>び</sup>の操<sup>そう</sup>手<sup>て</sup>よ於<sup>お</sup>るが如<sup>ごと</sup>く又軟<sup>なん</sup>弱<sup>じやく</sup>なる海綿<sup>かいめん</sup>の如<sup>ごと</sup>く自由自在よまじりま<sup>じ</sup>して其<sup>の</sup>女子の權の重大なること殆<sup>ほと</sup>んど君父

よ超<sup>て</sup>過<sup>か</sup>するものが御坐<sup>ま</sup>います<sup>が</sup>是<sup>は</sup>男子がその權を自<sup>みづか</sup>ら棄<sup>す</sup>てたので決<sup>けつ</sup>して婦人よ權があつて爾<sup>しか</sup>るのではありませ<sup>な</sup>去<sup>さ</sup>れば一<sup>いっ</sup>夫<sup>ふ</sup>一<sup>いっ</sup>婦<sup>ふ</sup>の正理が行<sup>い</sup>われませ<sup>な</sup>ければ男女全權は迎<sup>むか</sup>え望<sup>のぞ</sup>むことは出來ませ<sup>な</sup>せん今試<sup>こころ</sup>よ極<sup>きよく</sup>端<sup>たん</sup>よ涉<sup>わた</sup>りて論<sup>ろん</sup>じませ<sup>な</sup>うなら男子が已<sup>おのれ</sup>の財を以<sup>も</sup>て數<sup>すう</sup>婦<sup>ふ</sup>を擁<sup>よう</sup>するなら婦人<sup>も</sup>亦<sup>また</sup>自己<sup>じ</sup>財<sup>ざい</sup>を以<sup>も</sup>て數<sup>すう</sup>夫<sup>ふ</sup>よ接<sup>せつ</sup>しても宜<sup>よ</sup>い筈<sup>はず</sup>でありませ<sup>な</sup>すノウ<sup>く</sup>尤<sup>も</sup>數<sup>すう</sup>夫<sup>ふ</sup>一<sup>いっ</sup>婦<sup>ふ</sup>の國も有<sup>あ</sup>ります<sup>が</sup>さうですが我國よては男子が數<sup>すう</sup>婦<sup>ふ</sup>を擁<sup>よう</sup>するは古來より社會風俗の威<sup>い</sup>權<sup>けん</sup>よ制<sup>せい</sup>せられて當然の如<sup>ごと</sup>く思<sup>おも</sup>ひ敢<sup>あ</sup>て怪<sup>あや</sup>しむものはありませ<sup>な</sup>ん而<sup>して</sup>婦人<sup>が</sup>若<sup>ごと</sup>し數<sup>すう</sup>夫<sup>ふ</sup>よ接<sup>せつ</sup>したなら忽<sup>たち</sup>ち驚<sup>おど</sup>々<sup>と</sup>として彼は不<sup>ふ</sup>貞<sup>てい</sup>なり彼は淫<sup>いん</sup>逸<sup>いつ</sup>なりと論<sup>ろん</sup>じ立<sup>た</sup>ま<sup>す</sup>が動物が肉交の快樂よ至<sup>いた</sup>ては男女共<sup>ども</sup>よ輕<sup>けい</sup>重<sup>じゆう</sup>は御坐<sup>ま</sup>いませ<sup>な</sup>ん然<sup>しか</sup>るよ男子のみ情<sup>じやう</sup>慾<sup>よく</sup>を恣<sup>し</sup>よするも當然として婦人よ於<sup>お</sup>ては酷<sup>こく</sup>よ之<sup>の</sup>を譴<sup>せん</sup>するは甚<sup>し</sup>だ不<sup>ふ</sup>公<sup>こう</sup>平<sup>へい</sup>ではありませ<sup>な</sup>ん若<sup>ごと</sup>し婦人<sup>が</sup>社會<sup>が</sup>之<sup>の</sup>を不<sup>ふ</sup>公<sup>こう</sup>平<sup>へい</sup>と



して男子が數婦を擁するなら婦人も亦數夫に接する權ありとし  
したなら竟に此の社會は色慾の鬭争場と爲て徳義品行等は悉く地  
を掃ひ高等動物が下等動物の仲間入をしますでせう縦令夫程迄  
至りませんでも一夫數婦の弊害は彼是共淫逸に流れ社會の徳義  
を紊亂し風俗を壊敗せしむるもので御坐いますヨ

「彼の佳人は全く一夫一婦論かア或は言行相反する如きとは無から  
うカ」然うせば彼の寵愛が衰て來たものだから孤衾空閨の不平よ  
り激して一夫一婦論を担ぎ出したのだらうか其實一婦數夫論は彼が  
賛成なのぢやらうエ君もその數夫の一人に加りたからう「敢てその意  
なきよしも非ずサハハハ」と笑ふとき辨士は銀瓶の冷水を吸一  
吸して

諸君一夫一婦論の公正なること此の如く明々瞭々として居りま

すが反對論者は何處までも男尊女卑の邪説を主張しようと思ひま  
すから勢ひ又一夫數婦を道理あるもの、如く論じます今反對論者  
が金城鉄壁と頼みで動もすれば之よ立籠る説を擧げませうその説  
よ男子は繼續の爲に數婦を畜ふ義よして敢て色を漁し淫を貪るよ  
あらず一婦の兒子を産出せざるときは一夫よして二婦を畜ふは變  
則の正なるものよて所謂權道ありと論じますが成程一應はその理  
なきでもありませんが是は即ち逃辭です大抵一夫よえて數婦を擁  
するものは其家富豪よえて已が情慾を充さん爲よて眞に繼續の爲  
よするものは彗彗として曉星の如くです故よ之を繼續に妨げなく  
して一身の情慾の爲に數婦を擁するものなりと斷言しても強ち無  
理とは申されません

「ア何うだ、彼は男子のみ攻撃するが一婦よして數夫に接するを論



じないのは利己主義ぢやナラ然りく一夫よして數婦を娶るは縦ひ口實よもせよ繼續の爲ぢやと云ふ論点があるが一婦よして數婦よ接するは如何と是の問題の辨解をせぬのは横着極るテノウくの聲を發して演説の妨害を興へて遣うか

今日の聽衆諸君の皆鬚鬚丈夫よて巾幗社會を玩弄しようと思ふ人々が多數を占て居られますから妾の説又賛成者の少くないのは甚だお恨みですよ諸君妾が期く喋々論じ去り論じ來りましても尙ほ男子は婦人を己が慰み物だと迷信されますか今再び男女全等なるべき点を擧げてその遺を補ひませう夫れ男子は人類の種子を精氣よ含有えて居りますが形体を造成して之を産出するの器械を有て居ません又女子はその種子を含有しませんでも之を産出するの器械を有て居ります妻れば男妻相俟て人類生々の種を運るのであり

ませう然らば孰れを貴きも孰れを輕しとする理はありませぬ果して此の如くなれば一婦一夫男女全權は天地和合の眞理よして万物生々の理も原くもので御坐います故よ妾は速かよ此の眞理を實地よ施して内よ怨女なく外よ曠夫なく二性相共よ情交の歡樂を偏輕偏重なく享有せんことを希望致します  
と嫣然一笑して壇を下げれば此時まで聞然として喝采の聲なかりしか遽かよヒヤ／＼の聲と拍手の音よて滿場喧譁たり此時小腰を屈めて演壇よ登れる辨士を何者かと聽衆皆視線を之よ注げば辨士の茶色の五ツ所紋の羽織よ唐棧綿の袴を着下よは紅色襦袢を着たり頓て演壇よ登るや否直ちよコップの水を呑みて聽衆を一揖し扇子をパチ／＼鳴し乍ら説き出したり  
只今は此處の所の辨士が御機嫌を伺ひましたその跡へ直ぐこんな



まずい五面想を擲ぎ上げましては甚だ相濟ません譯で御坐います  
 が餘りお麗の計り御覽よ成りますとツイソレ諸君が謀反心でもお  
 發し成さつて江戸拂ひよでも成るとお氣の毒ですから私が之を豫  
 防の爲よ上たので御坐います(大笑)倍ハ私ハ落語家も亦氣概な  
 るべからずと申お入釜敷お話を一トくさりお喋舌いたして直様御  
 免頂戴ですが從來落語家と申すもの唯お失笑と云事のみ主眼と  
 してありましたが其弊遂よお客をして無理よでも笑せよと思ひ  
 父子兄弟の前よて言ふべからず聞くよ堪へざる閨中の秘事を評き  
 果ては高坐よ於て其醜態を摸擬するものがあります實よ耻なき  
 の極ではありませんか之を禮儀正しく且つ尤も陰事の話などを嫌  
 ひ避る英人などお聴せましたなら野蠻と評しませうか淫逸と罵り  
 ませうか悪くは魂消て開た目が塞りますまい(トヤ)くお客の笑を

求むるよ何も斯る拙劣なる方法を用おせんでも幾何も滑稽頤を  
 解き臍を絞る手段方法はありませう然るよ計此よ出ずモ些大層で  
 すが右の如き拙劣手段を用おずとも濟むべきを矢張用おますは落  
 語家の罪の勿論で御坐いますがお客も亦與て罪ありと謂はざるべ  
 からずでス何となれば落語家のみでなく何業でも其時世風俗よ適  
 するよ仕なければ生存競争の理よて絶滅をますから力めて其  
 時世よ適するよ心掛るので御坐います故よ當時の風が淫靡な  
 ら淫靡のお話してなければ向きません若し又當時の風が徳義を尙  
 び操行を重するなら淫靡のお話を致しても賞美する人なく否な聽  
 衆がありませんから勢斯るお話は消滅してその跡を絶て仕舞ませ  
 う假令ば今吾々が英國へ押渡して日本で辨ずるよや淫猥な話し  
 を致したなら皆耳を掩ふて聴く者は御坐いますまい然らば落語家



が淫猥のお話しを致しますのは時の風俗が淫猥なのですから仕方がなく強ち落語家計りも責られませんが豈に慨嘆の至りと謂はざるべからずです「ヒヤ、ヒヤ、」併し乍ら吾々も亦苟も教導職とか何講義とか坊主然たる位置を有するからは社會の木鐸となり社會の耳目と成て幾分か此社會の弊を改良し野蠻の遺風を去て文明の域に進めんとする覺悟なくしては成りませぬ

「ヒヤ、ヒヤ、」君鹿社會も人間らしいものが有るから可笑テ「ソ、ソ、」彼は正か前坐でもあるまいが彼が大言よは抱腹絶倒する哩「ハ、ハ、」彼は素より吾々が笑を博さうとして居るのだから……「ウン、」成程是よは閉口したナ

然るも吾々が此の如く堂々として君子又は學者の心持よて斯邊鎖の「フヒ、」ソ「フヒ、」だとか乾徳が何うだとか坤的がどうだとか云ひ

升と忽ち知りもしない癖よ生意氣な奴だと生意氣の三字を以て攻撃されますが百も御承知二百も合点の博學多才のヘコ帯先生方は兎も角御婦人方や小兒衆の知見よ乏しき人々よ強で益よなり且つ傍らお慰みよ成るお話を仕たなら幾分か人智を發達して文明を進歩せしむることよ於て決して其功なきとは申されませぬ此の如くよしてこそ始めて何講義たるの職分を尽したと申ませう然るも往々淫奔な客の意を迎へんとして不体裁のお話しを致しますは詢よ沙汰の限りで御坐いますナレドモ落語家が少しく高尚なお話を交へますと前申す通り忽ち生意氣の三字を以て痛く攻撃されますから中よは之に懼れて落語家は馬鹿氣た事で足ると甘心して居るものもありませう苟もその身が何講義などと呼ぶ、からは自から地位を占めて懸らんければ成ませぬ然るも生意氣な客の品評



位は避易するよくな事では到底落語家たるの職分を尽すことは出来ずまい是れ畢竟するは落語家も氣概がないからです落語家もして氣概がありませんせば滑稽實梯の間識す知らず人智を闡發し徳義を奨勵することが出来ませう併し是は少しく文字を知り道理を解する落語家も望むので決して七面相を遣ひ又ハステ、コ踊りなどをして狂ひ廻る眞の鹿連も望むのではありません而して現今の落語家で少しく才學あるものも御坐います但矢張その演ずる所を見ませば世間も有ふれたる人情話の續きもの位も止て而して續きものも往々男女の關係の淫猥な事が多く御坐います是れ落語家が氣概なきとは申すは淫猥の時世もは之でなくては適せず若し又之でなければ忽ち喉元が干上るから止むを得ずして斯るお話をするのかも知れません然らば落語を改良して淫猥の風を絶滅せしめん

よは落語家の氣概を起すべきの勿論ながら是は社會の模範たる上流社會より此の風を改めて貰はなければ成りません上の好む所下之より甚しと此の格言は方古不易動かすべからざる言で御坐います

「中々遣るぢやないか余程熱心だぜ熱心だから皮膚までも熱くなつたか知らんが高坐で演ずる都盛で聴衆も對ひ自己の羽織をサモ自満さうよ脱ぐは失敬ではないか君は妙な感じを起したチア、解つた」  
此間君は那の羽織を禁錮させたものだから羨望のあまり言外も發れたのだナ、糞う失敬ナ……

縦設ば上流社會で洋服を着洋食を喫すると忽ち下流社會でも籠服乍も洋服を着籠食ながらも洋食を食ひ殆んど鷄鳴と一般までよく真似でのまりませんか然るよ上流社會がハンセイボールや舞蹈會



なごて醜聲の聞ゆるとがありましては決して此の社會の摸範と爲て淫風を改むるとは出来ません何となれ其摸型が摸型でありま  
 すからです去れば何程吾々社會よ氣概があつて逆よ立て諫だから  
 と云つて勞疲もうけの骨折損で御座います夫れ然り然らば從來落  
 語家の淫猥談多きは當時社會の風俗が然らしめ社會の風俗の紊れ  
 たのは上流社會が然らしめたものだらうと考へます故よ此の社會  
 の風儀を改むるの上流社會より品行を方正よして下流社會よその  
 摸範を示さなければ外は徳義を裝ふて内は淫猥よ流れ皮想のみの  
 文明よして内部の文明は到底期することは六ヶ敷い是は私が斗大  
 の印を捺て保証致します……丁度跡連が見へましたから差し交り  
 ます

と退きければ例の拍手喝采よて聴衆の鼓膜を裂きたり君種々薩陀な

奇變辨士が現はれるが今度は何者が出懸るだらう出たく是は異形  
 だ那の木綿の五ツ處紋の入時頃否な夫れでは黒かつたツテ三時頃と  
 いふ眞赤よ禿げた羽織よ白色が鼠と化け綾も何も判然せぬ袴を穿ち  
 左の手よ天眼鏡を持ち左の手よ算木を持たのは如何なる量見で演壇  
 よ登るのだらうこの聴衆の集合を幸およ當用二錢身の上四錢と勤め  
 立るのかナアマア何を言ひ出すか見て居ようと罵り會ふを辨士は平  
 氣の顔付よて

エヘン拙者は是よ掲げて御坐る通り開明社會の亡者と申すことを  
 判断ナニサ演説致す所存で罷り出でました偕て當今の方々即ち明  
 治年間の青書生輩は此の易を以て妄言と罵り虚談と嘲り少しく目  
 よ蟹行鳥跡を辨するものは之よ迷いぬようよ思て居りますが是は  
 所謂生意氣と申すので決して左様な理は御座らぬ尤も街頭よ立て



常用二錢身の上四錢と喋舌くりよくも筮法を辨へずして愚夫愚婦  
 を欺く狡獪漢が御坐るが如何よ智慧がないよしろ田舎漢よしろ僅  
 か二錢を以て吉凶禍福を知り四錢を以てその身一代の幸不幸を前  
 知しようとは怨が深過るでは御坐らぬかヒヤク如何よ不景氣よ  
 して物價が下落したからと謂て左様な安直なものは御座るまいエ  
 ヘン若し果して一代の幸不幸吉凶禍福が前知されたなら危難も罹  
 るものもなく失敗を招くものもなく人々皆富貴長壽極樂安土些と  
 も心配はありませぬ而して拙者の如きも其禍福を前知しましたな  
 ら筮竹と天眼鏡よ命を繋ぐような果敢ない境界よは陥りませむ然  
 るよ是れ之を察せず僅々四錢の價を以て其幸不幸禍福を前知しよ  
 うと欲し若し當らぬ時は易占などは當てよならぬ所謂當るも八卦  
 當らぬも八卦だとして罵るものが御坐るが甚だ心得難き次第で御坐

る周易の書は人の訓戒よ供するよ用あるものよて中々意味深長な  
 もので妄迷者の爲よ筮竹を弄する爲のみでは御坐らぬ然るよ本筮  
 十八變も祿々解し得ぬ連中が無暗矢鱈よ易とさへ云へば妄迷社會  
 よのみ行はる、よう罵るの甚だ残念至極で御坐る又筮法だとして強  
 ち無益なものでも御坐らぬ物事よ決心力なき人よ果斷の處置を爲  
 さしむるは一ツの方便でせう縦令ば爰よ一箇の商人がありまして  
 今一ツの事業よ手を出さうとして少の故障あるよ憶して躊躇する  
 ものがあると假定しませう而して此の商人が判斷を易者よ求めよ  
 せば易者はその商人の意思を察し本人か孰れの方よ重よ意を寄す  
 るかを其言語舉動の間よ考へ又その模様手段等を詳しく聴て是な  
 らば多分十中八九は過るまいと認めたら易を以て之を証明して  
 本人よ判決を與ふれば思慮なきものや又い決斷なきものをして奮



發興起せしむるも足るかど考へます且つ自ら其事も當るものは誰れも迷ひ易きもので之も迷はず果敢の處置を爲す人は尋常人ではありませんせん必ず豪傑ならずんば聖賢その人で御坐る古し支那の慷慨家屈原先生さへ迷ふて詹尹よ問ふたでは御坐らぬか然るも彼の詹尹が屈原の問よ明斷を與へることが出来なかつたのは吾々社會の不名譽として嘆息すべき至りで御坐る熟ら今日吾國の有様を察するも屈原の如き愛憤の人物が最も多く而して屈原の如き地位に陥て屈原の如き迷を懷て居るものが幾何あるか知れませんと説き來れば滿場感極て嘆せざるも此なし

然るも是等の志士が易を用ゐずして反て之を護るものが多いは甚だ解せぬ次第で御坐る爰も人ありて愚夫愚婦は果斷がないから易を利用するも宜けれど果斷あるものは如何と問へは拙者は果斷あるものも亦易を利用して宜いと答へます何となれば其果斷は實も嘉すべく賞すべきも後の慮りなきを如何しませう故も果斷あるものもせよ氣概あるものもせよ忍ぶべきの時も忍ぶべからざるの舉動をなし遂も縲紲の禍も罹るものが續々現はれますが是は實も國家の爲も惜しむべく嘆すべき至で御坐る今拙者が試よ右の人々の地位よ立ちましても忍ぶべからず堪ゆべからざる事情あるも未だ時到来らすと想ひ直すは甚だ無念で御坐い舛から決して無理とは申しません故も拙者は右の人々も一個の方便を興へませう縦設ば言ひたき事も得言へぬ事や又は行ひたき事も行へぬ場合あらば誰れでも憤懣も堪へられますまい此時〇〇が言はせぬのでなく〇〇が行はせぬのでなく此の易の判斷よて許さぬのだと諦めたなら幾分か憤懣心を慰る方便となりませう且つ易は文王が暴君の爲も執はれて

るものも亦易を利用して宜いと答へます何となれば其果斷は實も嘉すべく賞すべきも後の慮りなきを如何しませう故も果斷あるものもせよ氣概あるものもせよ忍ぶべきの時も忍ぶべからざるの舉動をなし遂も縲紲の禍も罹るものが續々現はれますが是は實も國家の爲も惜しむべく嘆すべき至で御坐る今拙者が試よ右の人々の地位よ立ちましても忍ぶべからず堪ゆべからざる事情あるも未だ時到来らすと想ひ直すは甚だ無念で御坐い舛から決して無理とは申しません故も拙者は右の人々も一個の方便を興へませう縦設ば言ひたき事も得言へぬ事や又は行ひたき事も行へぬ場合あらば誰れでも憤懣も堪へられますまい此時〇〇が言はせぬのでなく〇〇が行はせぬのでなく此の易の判斷よて許さぬのだと諦めたなら幾分か憤懣心を慰る方便となりませう且つ易は文王が暴君の爲も執はれて



姜里の獄中よ作られたと云へば志士の身上よ取ては思ひ當る所も御坐らうと考へます右の次第なれば易も用ぬようよて決断なき人よは果敢の氣を生せしめ果敢よして氣概ある人よは其志慮を深からしむる功能がありますから決して易だとして悔るべきものでない否十開明社會の亡者否志士よは缺くべからざるものかと思ひます併し拙者は決断なき人よ果敢心を起さすは望みますが果敢の人をして易を以てその不平心を慰めしむるよ至るはあまり望ましくは御坐らぬと云へば

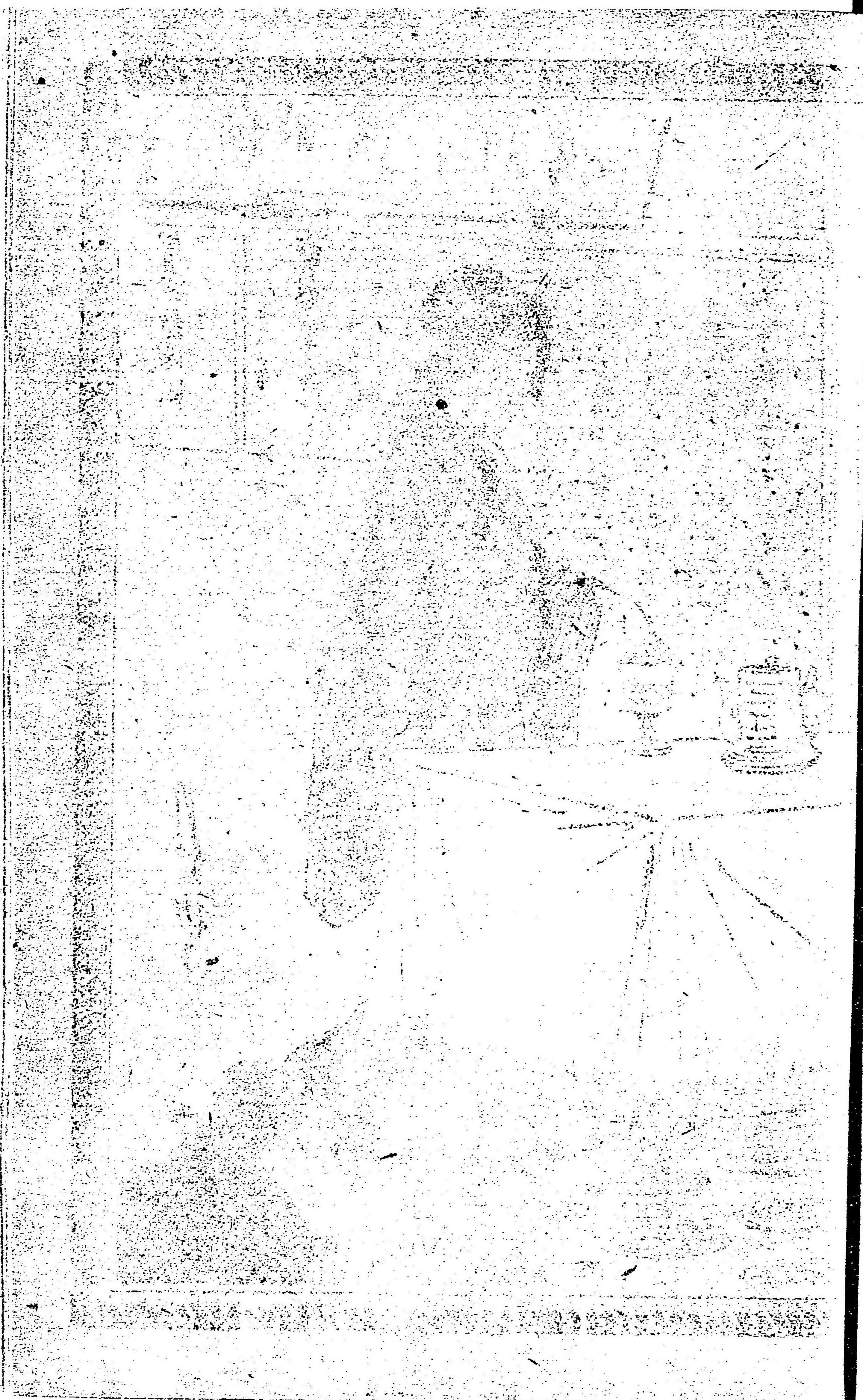
「君彼は見懸よ似ず頑固論も吐き出さんだつた子ウン幾分か寓意ありだが彼が論申易が許さぬと諦める云々よ至ては實よ悲憤な語さ中々「只の易者ぢやあるまい」爰で男の助を氣取つては困るせイヤ出現まじくたぞ是れは格別那那の矯舌を鳴してへい今囑はと遣られてい憐

慨家も浮れ出し不平黨も踊り出ざるを得ずだ成程藝と云ひ容色と云ひ否藝は未だ知らなんだッけ併し衣服も中々華美だが那の淺黄色の絹縮のお召は宜いが袖の先よ少し星があるの何處かで見つテッウ富澤町邊ぢやツエ君は古着商のようよよく衣服の詮索ばかりするが見給へ彼の色くつきりと白く鼻高からず低からず口元の愛嬌づきて目のぱつちりとした所は如何なる形容辭も之よ充ることば出來む彼の秋波よ流騰されたなら千軍万馬を叱咤して隻手よ政海の怒濤を回す大豪傑僕の如きも恐くは惱殺せらるゝだらうライ君烟草の火が膝の上よ落て居る幸ひ君の流涎で消防したまへイヤ大變くどうく典物の價直が下つた併し彼の爲だと思へば毫も惜むよ足らずサ「君の好色漢よは流石の僕も三舍を避ると一人が見惚れば一人が悪口を叩て居るを辨士は斜よ打見やり一層嬌聲を發して



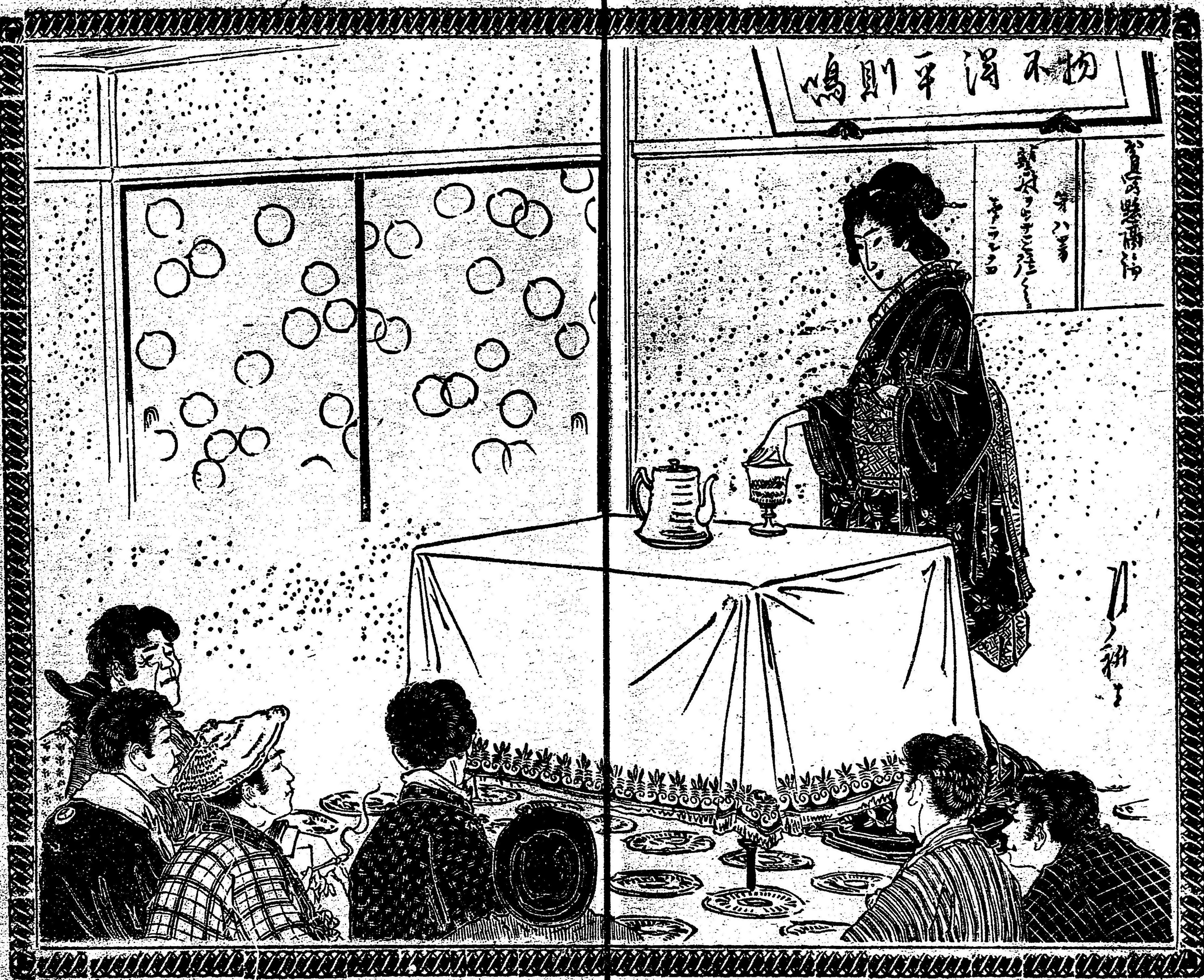
へい今日は……

ヒヤ／＼ッラ始つた堪らんぞ／＼然う浮れ出しては他の聴衆の妨害  
よなるワッレ君帽子が後へ落たゾナニかまひん／＼黙て居たまへ  
妾は那の藝妓をして三弦のみを賣らしめよと云ひます演説を仕よ  
うと思ひますが笑つちやア厭嫌ですよ皆はん御存でせうが私たち  
の本業は三弦を弾てお客の酒興を添へますのですすが近頃は三弦を  
弾きませんで之を枕よする者が多くなつて参りました故藝妓の娼  
妓の職權を侵すの又は小判癩癩だのと痛論されますが全くその通  
りですから辨解することが出来ません實は私達藝妓社會の品格を  
下して仕舞ひました……私は残念ですよアすから爰で少しく藝妓  
の歴史を摘んで昔は只今のようで無つた譯を証明しませう那の古  
昔は酒宴遊興の席は侍つて歌舞系竹の業を以て渡世としますもの





鳴則平湯不切



新大正  
茶室  
鳴則平湯不切

鳴則平湯不切



は所謂白拍子しらひやうしとて今様朗詠いまやうりやうなど謡うたて多くの人の遊びものとは成り  
ましたが決して只今の藝妓の如く猥わだかまりも黄金わうごんの癩痢てんかんを起すものは  
ありまへんでした唯だ自分が好すたとか又また思寵おんちやうを受けて妾めかけと爲り  
て身を委まかすことがありますが今のようよ五六人の妾と爲たり又は  
人を撰えらぶ誰だれよても情を奪ひぎは致いたしません曾我十郎祐成すげなむねなりが妾大磯おほいその  
虎とらや義経の妾静しずなぞを見ませば當時の藝妓即ち白拍子しらひやうしの有様がよ  
く知られます彼の清盛の祗王佛せきわうぼつよふきまざる重衡しげひらの千壽宗盛せんじゆそうせいの熊  
野くまの辱はぢくも後鳥羽天皇の龜菊かめぎくよ於おるなどの皆悉く白拍子しらひやうしよして今の  
藝妓の濫觴らんさうであります

君今説き來た容よう子すでは中々君などよ轉てんじさうもない大よ目的が外ほかれ  
たよ一いちナニめんな頑固くわんこ藝妓ぎぎよ誰たれが意いを屬ぞくするものか二六時中香箱かうきゆうを  
作つくて茶ちやのひき通とほじだから那なんんな本ほんを鳴ならすのサ自己じよ利りと見れば



怒ら寝ぬ不利と見れば遠慮なく請る實よ君の心は猫の目の變り易いと一般で又その猫は譲らぬ輕薄だ君の父祖は鳥の精でも愛そと見へて君の口より殆んど閉口するあまり閉口もせんぜ婦人を見ると君の口は締りがなく常よ開放と來て居るもの……イヤ實よ君のお喋舌よは驚たと話し居るを辨士は素知らぬ振よて

その後白拍子の業も廢れ今様も絶へくよなり遊女は専ら淫を露くようよ成て此の淫風一般よ蔓延して遂よ花院といふものが出來ましたが是の派は全じく遊女とは申乍ら藝妓即ち昔の白拍子の正統ではありません扱て淫を賣るものが出來て藝を賣るものがありませんから酒宴の席より三味線彈小謠の師匠などする女を招娉して酒席よ侍らしましたたが是が則ち今の藝者の始まりで寶曆安永の頃でありましたさうですシテ見ますると藝妓は白拍子以來藝のみ

を賣たもので決して今日のように三味線を梳よしたものではありません併し藝妓がその本業を後よして娼權を侵すよ至りましたは強ち藝妓ばかりの罪ではありまへん則ち之を呼ぶお客も與つて罪がありません否な之を權評よ掛ましたらお客の方が罪が多ふ御坐いませうノウウく何となれば今日のお客は藝の巧拙を問はずして容貌の醜美を問ひ妓を娉するよ始めよりその意藝よあらずして色よ在るのですから藝者も亦藝を後よして色を先よするようよ成りました故よ若し藝妓がお客よ袖裙を揩かれたとき凛然として妾は藝を賣るものよして色を鬻ぐものよあらず請ふ色を買はんとならば君駕を北里よ枉げよとピンシャン刎付たら廣ひ東京よは氣概がある深川の風があると寝る人があるか知りませんが忽ち御神燈の火の消へて表の格子戸よ雀が巢を作りまます左すれば税金や所得税よ



詰り果ては鑑札をお取上げよをりますから好まない人でも是非なく  
 三味線を枕よするのです是は私達の内幕を知た通人は決して無理  
 とは申ません然るよ下情よ通せぬ疑道徳家は箇様な事情を知らず  
 して徒らよ藝妓は巴れが職務を忘れて私窩子の業を爲すとか或は  
 風俗を紊亂すとか何とか責めますが眞實よ私達程つらい稼はあり  
 ますまいロヤ／＼／＼又昔白拍子が品格が好つたのは當時の  
 お客が今のお客の如く悉く色のみを愛するでなく單よ藝のみを以  
 て娯めたのと又その内幕よ心配が無いからですその内幕の心配と  
 は何だぞ申せば即ち營業稅所得稅なぞです白拍子の頃よは營業稅  
 や所得稅があるとは聞ませんでした夫れ故暮しが樂ですから自然  
 品格が好くつて身とくありませんでしたらう西語よ金は即ち權力  
 を手と云ひます通しや金さへありますせば又權職もあります筈です

夫れ故今の如く金の爲よ心をらすも身を許すよいな卑屈なことも  
 はなかつたのでありますロヤ／＼昔さん考へて御覽なさい私達だ  
 とて金さへあつて四季の仕度や税金よさへ困りませんければ西國  
 なまりの御髻參々たる無粹漢よ身を委すのは敢て好む所ではあり  
 ません併し中よは玉の興よ載うと思ふて全くお髻の好きなものも  
 有りませうが是は別物として置ます扱て藝妓がその本業を抛棄し  
 て娯權を侵し爲よ風俗掛なぞの出来るようよ成りましたは素より  
 藝妓もその罪は免かれず又藝妓のみでなく將たお客のみでなく別  
 よ理由のありますことよて……ロヤ／＼種々の原因よりして斯る  
 有様よ成りましたのです故よ只今の如き淫風を改めますよは藝妓  
 は勿論お客さん達もその品格を白拍子時代のようよ高尚よして藝  
 を買て淫を買はず而して一方よ於ては妾達をして白拍子時代の如



く税などよ心配なきよう安樂よさへ仕て下さらば藝妓も白拍子の  
ようよ成るよ相違ありません妾の早くさう成て三味線ばかり售て  
見たう御坐いまり左様なら……

と左襟を掲げ紅裙を曳て演壇を下れば聴衆皆眸子を轉じ睫尾を三日  
月形よせざるもの稀なり中々婉曲よは云ひ廻したようだが余程無理  
な相談だテ「實よアノ氣概は古の白拍子よも劣らぬ所がある又アノ位  
な才色兼備の藝妓なら君が腹立まさされよ罵た如く香箱を折る氣遣ひ  
なし嗚呼泥埋の蓮花とは彼を謂ふのだよう君は頼りよ彼を賞賛する  
が若し彼が果して藝のみ賣て情を鬻がぬとなつたら君の如き狡獪兒  
は藝妓よりか門付か寄席の方が經濟だと云ひ出すよ極て居る君が心  
中を悉く書き出さた子アノ通り狡獪な反駁だもの……「イヤ今度は有  
難くない辨士だ併し演題は立派で「貧富懸隔論だぜ」ウソ乞巧辨士の導

だだらり併し目倉織の股引に全じ終纏を着た所は少しく上等だか矢  
張其論旨は平々凡々だらりと輕蔑する語の辨士が耳よ入しと見へ少  
しく勃として肩よ掛たる手拭を取て驚攫よし巻舌と云ふ鹽梅よて  
私ちは爰よづら下げてある演題を以てやらかしやすが私ちは職人  
ですから七六ツケ數事は喋舌ませんから短刀直入とかで直く本題  
よ取り掛りやす  
ナンダ取り掛るなぞと丸で手品遣ひの口上ぢやナニ夫れ……大工辨  
士だからサ

夫れ……  
「夫れが可笑ひ」マア聽て居て見たまへ……  
我邦の人民は二百有余年間無爲大平の世よ安眠して居ましたが維  
新以來西洋の文物が吾國へ輸入して來まして社會百般の事物よ變



動を起しましたが一休國が開けると人民が幸福を得る筈でありや  
 すか反て一方のもののみ幸福を得て益す富貴も成り一方のも此は  
 幸福を失ふてますます貧困も成て貧富懸隔するとは頃ろ經濟上の  
 一問題だそうですが國が開けて貧乏人が増加するとい解からねエ  
 道理ぢやありやせんか國が開けるも從て人民が樂よあるなら好け  
 れども反て苦よ成るなら開けねエ方が余程好い皆さん定めて知て  
 居られませうが夫の歐羅巴は文明の本家本元であります然るも鐵  
 道や電線や瀾車やその外面は酷だ立派よして適れ文明國のよう  
 すが其内部はと云ふと野蠻國より遙かよ劣た所がありやす夫の何  
 だと申せば進歩するも從て一部の人民がますます富んで一部の人  
 民がますます貧しく成るといふ奇体を現象でありますシテ見ませ  
 ば文明は財産家よ取ては良友でありませうが無財産家よ取ては善

敵であります今吾國でも西洋の文明を輸入しました故來なくつて  
 も宜ろしい貧富懸隔といふ悪魔も俱も遁入て参りました一件この  
 貧富懸隔の原因は種々ありませうが先づ自然獨占事業などか重  
 るものだと思ひやすこの獨占事業の事よ付ては曩も人力辨士も辨  
 じられました通り鐵道會社だの水道會社だのいふ巨萬の資金を有  
 する所の會社が現はれて來て貧民の業を奪て獨占をするから貧民  
 は業を失ふて是等の會社よその喉を絞らるゝのであります頃又私  
 達の業を奪ふ工業會社だとか土木會社だとか吐す奴が一ト兩毎よ  
 陸續と出來やしたから段々と業が暇よ成て來ました併し右の會社  
 で相當の手間を呉れて悉く雇ふて呉れ、ば宜う御せいやすが中々  
 左うは往きかすまい又縦令へ雇ふて呉れたよしろ會社では私達の  
 暇を見込んで極く安で雇ひ入やすから割出の酷し又會社は資金が



多い所から種々の機械を用て人工より易くから人は段々不用よ成て來ます人が不用よ成て來ますから私達は暇よ成て喉元が干上て参りやす是は手間取の私達のみでなし棟梁達は皆此の會社よ壓倒されて仕舞やす去ればとて手を束ねて餓死するも馬鹿氣で居ますから腕の折ん限り力の續かん限り奮發して彼と競争を試みやしても先方は二三人の職人が機械よ藉て百も二百も一時よ製出するを人の腕では僅かしか作れませんかから自然先方の品は安く此方の品は高く成りやす左すれば安いものは賣れ高いものは賣れませんのは當然の事です然うると云つて安く賣れば手間よ合はんで食ひ込みやすし實よ身体極るとは此事でせう併し夫は生存競争の理で負けたのだから仕方がないと云ふ諦よい人があります私ちをぞか中々執念が深いのか左う諦められませんか先刻からも馴き合よ出

またたが歐羅巴などで社會黨だの虛無黨だのと云ふ過激な連中が起りましたは私ちのようを不平の人が段々集れ大塊りであります併し私ちよりな過激な事は極々嫌でありますけれどもよく獨占會社などの爲よ業を奪はれて親子妻子が餓死するような淺間しい場合となりましたら之を爲よ發狂して彼等は私達の讐敵たからナラシテ仕舞へど狂ひ廻るかも知れませんが一犬吠を吠へ万犬實を傳へて發狂者がますます多く成て破壊主義でも唱へるものが出來ませば治安よ妨害がありますから社會黨條例の如き又好まじからぬ條例が増加ませう左うなると又之が爲よ罪辟よ陷る人が幾何あるか計られませんか故よ私は右様の事の起てから之を制せずして未だ起らざる前よ何と方法よ設けて無智の職民をして刑戮を免かれぬんことを希望しやす



何だか今日の演説は貧富平均論が多数を占て居て出る奴もく定り  
 きつた事を繰返く述べ立るよは實に欠呻が出る哩併し此の不平演  
 説は出席する辨士達の身も取ての貧富平均の緊要的だらうがあま  
 り不平ばかりでその塊が耳へ出来たのか余程熾衝したような心持が  
 するチト心を慰むる面白い辨士が現出すれば好いソラ出たく紅  
 樓の君が自稱情婦は階だ背て居るぜ是は愉快く眞よよく背て居る  
 が彼は僕の準備細君ではない彼は此間某樓から尾彦へ倉易へした手  
 子鶴とかいふ妓女ブーン君は中々探察がよく行届く曾て名簿を携へ  
 乍ら戸毎に北里の戸籍でも調べよ歩たことがあるのか否らずんば常  
 よ細見でも暗誦して居ると見へる戯けるを随分好い容色だ併し今流  
 行の束髪など洋服拵へでなく高兵庫に袴と来ては古風だナ夫れ  
 丈は君の説は同するが娼妓がその服装のみ藝妓に模倣し權妻を具

似たとして矢張娼妓は娼妓さ彼は愛よ見る所ありて流行風を學ばぬは  
 感心だ所謂存羊の意があるのだらう君辨士が演じ出したぞ夫では聽  
 かざるを得ず何だ演題は娼妓を束縛するは牛馬と同一なりやか鐵  
 釘流の艶書如く馬鹿な長いナア

皆はむ妾は朝よ源氏の殿を送り夕よ平氏の君を迎へてお客の機嫌  
 氣襪を取る浮き川竹の流れの身ですから床の中此痴話陸言はよう  
 知て居ますが演説などと云六ツケ敷い事は知りんせんで今日が始  
 ていすから拙い所は堪忍してくんなまし(喝采)那の妾達はこんどお  
 耻しい業をして居りますから古より尋常の人間とは見做されず牛  
 馬の如く束縛せられて居りました故籠の鳥などを稱へられました  
 が日本よも亦沙布その人の如き御人物がありました維新のとき人  
 身を賣買或は束縛するは野蠻の事よて開明世界よあるまじき事だ



とて娼妓の解放の命が出ました来より娼妓は出稼となり娼間は貸  
 坐敷で改まりました娼妓は自儘は貸坐敷は於てお客の酒宴を待り  
 てお寢間のお伽を爲し貸坐敷はその名の如くたゞ座敷のみを貸す  
 といふ法よ成りましたが矢張り貸坐敷より前借をして何年とか年  
 期を定めてその家の抱へ人と成りますから實際人身を束縛されて  
 居るは古しと違ひありません併し一旦その身を抵當として前借し  
 た以上はその期限間は自由權利と云ふものなく牛馬と全前だと致  
 しませばその間は人類たるの責任なくて宜い譯けでありますソレ  
 ヤ／＼ノ／＼

「タイ／＼君會て自由娼妓と評判の高たは彼かナ」否々那は河内屋の  
 娼妓ヲ／＼然らば娼妓も中々自由黨が現はれるナ今ヨ三里以外へ  
 娼去を命ぜらるゝたゞり馬野出すべし／＼」と云ふは心配も及ぶも

のハ彼等の娼去を命ぜられハ娼を生じて飛び去るゾイヤ僕は連人  
 社會の爲よ吊するのチ夫れこそ杞憂と謂つべしシヤ

明治五年の娼妓解放令を讀みなんしたお人は知て御ざんせうが  
 當時の御布令ヨ娼妓藝妓は人身の權利を失ふ者よて牛馬よ異なら  
 ず人より牛馬よ物の返辨を求むる理なし故ヨ從來娼妓藝妓ヨ借す  
 所の金額は一切償ふべからずとありました去れば娼妓は務めの申  
 は牛馬と全じきものよて人たるの責任が無きものです若シ又責任  
 があるとしましたなら夫丈けの自由權利と云ふものが無くては成  
 ません尤も只今の娼妓は従前とは違ひ大ヨ自由を得ましたが矢張  
 り娼妓は廓内ヨ押し込められてその範圍を出るよは中々手敷が掛  
 りその上出たからと云つても相當の護衛兵ナラ宜ウ御坐いますか  
 實は囚徒が押丁ヨ護送されて外役ヨ出るか又は牛馬が牽かれて帶



よ出ると一般よて決して自由なり権利ありとは申されません娼妓は斯の如き有様ですが之よ反して藝妓は大よ自由を得て居ります藝妓とても全じく前借をして抱よなりませば尤も自前もありませんのでその出稼たるや理娼妓と違ひありません然るよ娼妓は束縛を受て一步も外出するは自由よならず藝妓は氣儘勝手よ漫遊か出来るとは甚た偏頗極る譯ではありませんか是は藝妓は客の娉よ應ずるもの故左る束縛は出来ず藝妓は内よ居て客を迎へるのだから束縛しても宜いと云ふのですか内よ居ようが外へ出ようが其自由權利よ至ては全様でなければならぬ筈です又藝妓の藝を售るので娼妓の如く淫を賣らぬから夫れ丈け権利ありと云ふのですか當時の藝妓で淫を賣らないものゝ恐くはありますまい然らば藝娼とも高下優劣のありません夫れよ娼妓のみ牛馬全前よ束縛せられて毫も

自由權利なきのは情けない次第では御さんせんか果して娼妓は牛馬と全前だから束縛しても宜いと云ふ譯けなら只今も申た通り娼妓たるの間は人たるの責任もなく義務もなく只だ牛馬が使役さると全じく娼妓が職務たる間中の事さへ尽したら宜いでせうロヤ、然らばお客から借た金は勿論務めの間出来た負債も何も蚊も返すよ及ばず義理も人情も入らず安氣なもので御さんす併し乍ら是は理論上の事よて實際左う往きません假設ば私がお客さんのお金を借たと假定しませう而してそのお客が若し野暮なお客で返金の督促でもしなした時私ば牛馬と全して人たるの責任がないものですから知りんせんよ云ひましたならお客は忽ち怒て告訴しませう告訴されて見ませば知りんせんとは法律上云はれませんから之よ應じて其裁判を受けぬばなりません斯く成りますときは既よ



人たるの責任ありと云はねば成りまします。斯る有様で見ませば實  
は娼妓ほど憂辛悲いものはありません。ほんよ苦海とはよう云ひま  
した「ロヤ」く皆さん不愜と思て下はいナ妾達は謂は、牛馬の資格  
を以て人間の責任を帯び居るのです。から至苦至難の地位でほんよ  
辛氣の事でありんす。併し此の不自由不完全の社會よ生れて自由を  
得んと欲して反て罪を得て不自由な身よ成る人々がありません。から  
私達ばかりで無いと諦めますがほんよ儘ならぬ浮世さんす……  
と鼻紙を以て半ば顔よ當て演壇を下るその艶美と高尾小紫も耻づべ  
く見へければ聽衆の顔色忽ち七面鳥と化け目を細ふするものあれば  
鼻の下を長くするものあり或は開た口を指もて塞ぎ或は願懸し時な  
らぬ垂米を流すもありて種々なる變相は早取寫眞よ寫しなばあどけ  
繪の異物が出來得べしと想像せられたり「君如何だへん」な妓を娯し

加ら定めて愉快ぢやらう否々娼妓を娯する目的は那の一方よ在るの  
だ然るよ彼が如き娼妓を娯せば矢鱈よ自由よならして其目的を充  
分達せしめんから不愉快サ僕などは矢張り婦人の命之れ從ふ  
と云も卑屈否柔順のものが好い故よ僕は純粹の男女異權論者ぢや「君  
の如き手前勝手な論者があるから道理は行はれない嗚呼無理が通れ  
ば道理引込むとは宜なり」と嘆するは口ばかりか夫かあらぬか知  
らねども無暗よ辨士の品評を下して著醜い奴輩だと他の聽衆が不平  
を鳴しても不平は本會の主意なりと平氣の顔よて喋舌居たり此時表  
の方違かよ騒がしく成るよ何事の起りしぞと聽衆一同よ立上れば數  
名の巡查躍り入り矢張り出席の辨士を執へ去るよぞスリ集會條例違  
犯ぢや「く」と動揺めき立ち聽衆中よ過激の徒は巡查よ抗して辨士の  
拘引を拒まんと煙草盆を投げ付るものあればステッキを振り廻すも



# 版權所有

金松堂藏梓

明治廿五年五月三十一日

明治廿五年五月廿日印刷

第四八號以版權登錄

明治廿五年五月廿二日出版

販賣所

世界各書林

印刷者

幸田勝三

東京日本橋區本石町一丁目

發行者

辻岡文助

東京日本橋區橫山町三丁目貳番地

著作者

谷口政徳

東京下谷區仲御徒町三丁目四十八番地

東京常盤橋活版所印刷

39775  
7640  
44

不平腸ちぎり畢  
演説

のありて彼は共よ打ち合ひ組合ふ上を下への騒動よ咄嗟と打驚き  
眼を開けば是なん居士が南柯の一夢よて身の机上よ俯してあり嗚呼  
不祥な夢を見た摸喉く<sup>く</sup>と<sup>はら</sup>威ひ了りて時<sup>と</sup>時<sup>と</sup>鐘<sup>い</sup>を見れば平や午後四點  
鐘をりエ、又一日の課程を怠た哩と不平たらく

